

麻生路郎主宰

新報 川柳



櫻花號

清 酒

賀
正

白 鶴 禮 讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたいゝ話
 いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘
 嘉納合名會社釀





近作

麻生路郎

千疊敷にて

新婚が太平洋をバツクにし

湯崎白濱遊覧バスの霞むとこ

照國丸のテツキに關根山彦博士を見送りて

洋行の肩をたたたくは同窓か

子が病んで帆の動かぬもさびしうて

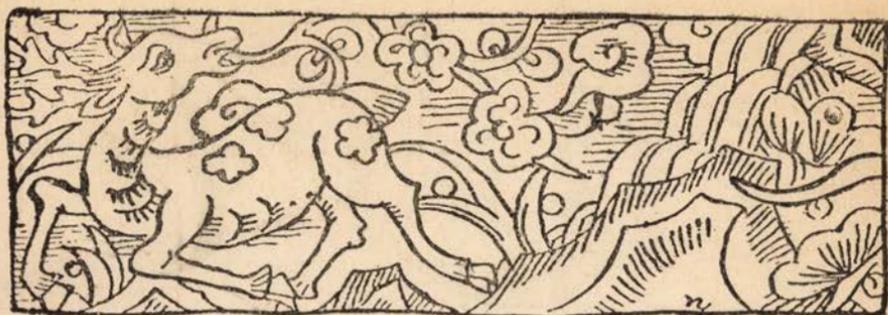
育て親のなげき酸素にけつまづき

四男洋逝く

母の輸血も空しく春の息をひき

三男一步尋一に入る

百貨店子の入學を見逃がさず



川柳雜誌第十二卷第四號目次

文苑

武玉川二篇研究(十二)

梅本秋の屋
森子省二魚(三)

春窓懷古錄(上)

永田かほる(天)
高橋(九)

櫻名所

綿谷摩耶火(三)

櫻と柳樽

西田 艸樂(三)

月評街の高臺

山雨樓、丹樂路(酉)
水車、艸

川柳ハイロツト欄

福田山雨樓(毛)

明治以後の川柳年表(二)

西島 ○丸(吳)

柳壇畫報

高島玉兎明君と舊冬物故された夫人……食滿南北翁夫妻と
吉丁、正光、亂耽の諸君

創作

近作

麻生路郎(一)



近作柳樽……………麻生路郎選（六）

川柳塔……………麻生路郎選（四）

粒々集……………鞍馬、柳秀（四五）

櫻、さくら……………葭乃、山雨樓
柳次、正光、吾水（五）

日本名所名物川柳（東京の巻）（二）銀座……………前田雀郎選（六）
宮尾しげを畫

本社三月例会……………毛利九波記（五）

一路集……………增位汀柳選（五）
藝妓……………山本丹路共選（五）
草……………東谷聞路

川柳光耀會……………麻生葭乃記（五）

各地柳壇……………路郎、艸樂、汀柳整理（五）

川柳書架（五四）……………川柳家戸籍調……………綠雨（五三）

上汐町から……………汀柳……………編輯の窓……………山雨樓（七二）

題字……………楢重……………表紙繪……………きよし、鳥平、幸三郎
しげを、路郎合作

報・畫・壇・柳

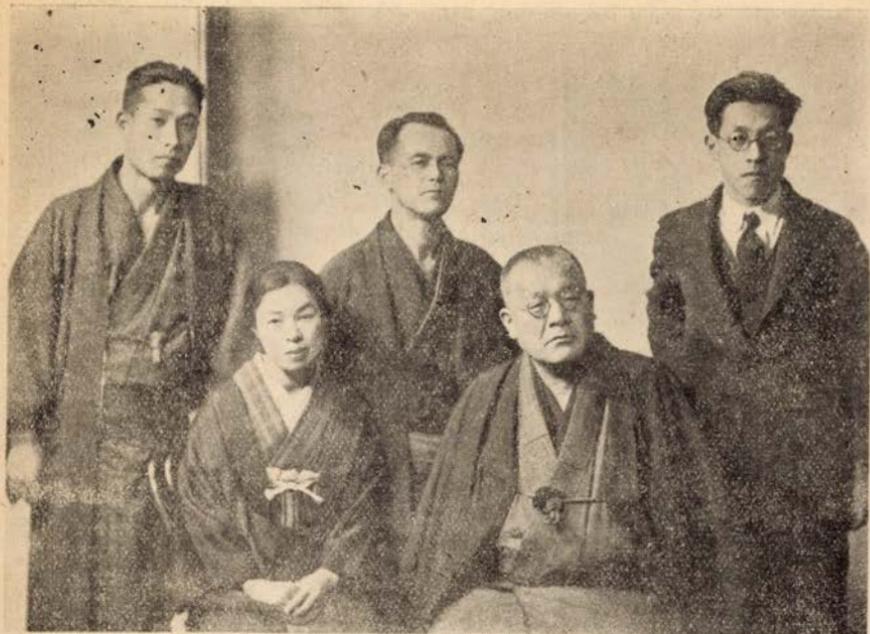


眞應僧女を懐ふ
ふれ風の眼にありながらはるかなり

玉兔朗



東部川柳師高島五郎君
此堂其夫人たれさ故物冬置こ



ご妻夫翁北南福食目客社本
君諸の耽梨田佳・光正起岸・丁吉路糖

櫻

櫻 櫻 駕に 揉られて みたう なり
 櫻の 下の 前後 不覺を 羨まれ
 假面して 櫻に 自我を 見られ まい
 夕 櫻 開いた ままの 辻電話
 花 よりも 集印帖の 忙しさ
 櫻 咲く 國の リキシヤへ 膝を立て

正 吾 柳 某 山 霞
 光 水 次 人 雨 乃
 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻 櫻



近作柳樽

路郎選

マラソンの殿り子等に勵まされ

大坂

大門

分譲地を歩るかされてる銀狐

紙屑を蹴つて落したパスガール

五六人蹴つて来て清交社

入學

受験のときの枯木すつかり花が咲き

百姓の雪見酒とは惨めだね

ニヒリズム爪切るうれしさがあぞ

金肥の匂いがせつない鼻をつく

引算はかなし月給もらふた日

冬の陽へさぼてんのとげ空威張り

長野

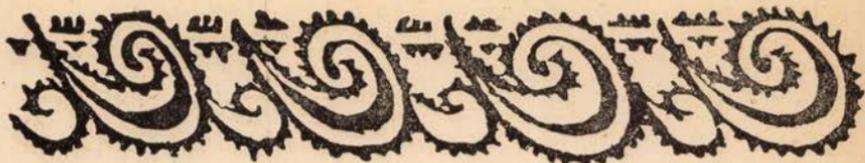
有爲郎

同

同

同

阿伽陀



退院の話へひるの湯があふれ

五君退院す

かへる友自轉車ベルを鳴らしゆく

節分の豆があたつたくすり爆

停電へ煉炭の穴紋の様

一錢の美しい音慈善鍋

風がありお地藏さんの胸掛

退職へ意外に減つた年賀状

おかしさは粗服まとへば侮られ

大晦日仁術などを考へる

あばら骨虚勢のやうに息を吸ひ

十六の黒のリボンが眼にしみる

春立てばサイレン山に溶けて鳴り

雪おちる音故郷の母と寝る

友を失ひて

たそがれの空へ大きな影法師

階級のうつろな廣さ療養所

露ヶ池

縷紅

松山

同 耕一路

愛媛

同 孤鶴

高知

同 翠葉

大阪

同 水客

露ヶ池

同 スム



風邪引きへ折よく紀元節となり

雲の峰僕はどんなに小さかろ

養子に行けとずるい眼で云ふ

働いて歸れば我が家夕焼ける

葬式で空の廣さにふと氣付き

宿直の夜具は肩から風が来る

シユンシユンとペンに競うて湯がたぎり

うるほひのない世に住んで道を説き

爭議團まだ出る煙にらむなり

いわし盛る皿が六枚現實派

好きな星が見えない夜の療養所

母と云ふ自覺わたしを忍ばせる

さり乍ら別れてふ語の寂しさよ

とぎすます月人妻の戀に似て

ひらがなの風呂のなまへがうれしいね

ひやくかな腫となりて筆を擱

子も孫もはたらいてゐる蒸したほる

夕刊は片手乳房へ来る粉雪

兵庫

同 天 秋

川

同 同 しとし

大阪

同 敏

盛ヶ池

同 同 由紀美

富山

同 同 照坊主

大阪

同 同 同 新市街



記事になる筋を地獄と云ふへ落ち
つとめもつ身の明日をいたはつて
十二時の時計の前で鼻をかみ
かゝる時友達甲斐の夜の道
おい酒だ酒だとすさみ切つてゐる
窓硝子に文字かく寒さとはなりぬ
泣けるだけ泣けとは母の臺所
ソフア一でむすんだ夢を謎にする
冷酒で居る小使の小言さく
聞馴れた小言思はず苦笑する
手のとゞく所へ水薬置いて寝る
かなしくなつて一人懐爐の灰をふく
灯を消して静かな早春の呼吸さく
ほのくくと明けそめてから雑魚寝する

桃太郎姐さんの小鼓を聞く

隙のないかまえに髪もゆるゝなり
駈つけて見ればはかなき北枕
野遊びへ母は朝から鮎を卷き

今治

仁川

尾ヶ崎

津戸

竹原

登ヶ池

松江

大坂

同

曉

同

可

同

觀

同

吉

同

蛙

同

六

同

雛

同

同

菊

同

童

宵

月

右

庵

朗

代

路

同



風采が外交員にしてくれる
 交叉點まだ断足が出る若さ
 百姓の雀を敵とも思ひ

妹嫁ぐ

嫁がせて朝夕の膳さびしがり
 摺箱子こゝは妓の控室
 發展へまだく遠い場末の灯
 淋しさを日記に残す人生觀
 すぐ泣ける氣性を友に嗜まれ
 赤字々々社長靜かに御決算
 寒月が繩のれんまで送りこみ
 花名刺これも資本の一つなり
 捨鉢に呑んで來ました妓のろけ
 お店者金に換算して笑ひ
 中年の戀はけろりと捨てられる
 逆もいゝ仲にされてるライスカレ
 木鉢の音も譜に合ふ梅日和
 掌の幸を女はうぬぼれる

大阪

今治

高知

名古屋

神戸

竹原

刀根山

東京

今治

素月

同心府

同珍景

同嵩喜固嵩

同朝雄

同春帆

同沙門

同史葉

同小松



意地といふ強い言葉の底をゆく
 生立ちは語りとむないナンバーワン
 孫と来て春の踊りへ伸び上り
 ストープヘマダムはしどけなく太り
 吹殻と小説本と女給ゐる
 腹立の箸を動かす手はやます
 猥談の外は鋭く冬の月
 優勝戦で泣いた四月は社会人
 御通夜の僧猥談も知つてゐる
 片言を言ふ子に廣告球がゆれ
 工事場の活氣そのまゝ酒となり
 反駁は酒の力も借りて云ひ
 本當の事へ世間は眼を見張り
 世帯馴れ女房クリームだけを塗る
 茶葉服戀しいものに我が家の灯

病床にて

神を祈つて寝返りする夜半
 假そめの病十有五年——夢

大阪

神戸

今治

神戸

松江

奈良

名古屋

大阪

同 沐 天
 同 木 圭
 同 小 樓
 同 楚 堂
 同 梟 人
 同 葉 魚
 同 世 香
 同 葉 光



二月一日深夜街で拾った自動車衝突唇を破り前齒を祈る (二句)

衝突へ マスクは 朱に 染り けり
衝突の 怪我も 不孝の うちに され

廣島縣瀬戸田島に遊ぶ

こゝも 亦 夜の 女の 嬌態 や
履歴書と見較べられて 寒う なり
電話 口 明日の 髪形 相談 し

喜山氏息女を悼む

慰めへ 眼鏡の 玉が曇つて 來
黒襟の 堅氣になつた 艶があり
安來節 雛妓の 口から 咽喉 佛
鐘樓へ 母は 餘生を 規則じみ
騒いでる 國あり 世界地圖を 出す
比類なき 甘さ 糖業保護 政策
アダリンの 睡魔に 夢は濁り くる
今日限り 酒をやめたと言易し
集金に 雨も 嵐も 平氣 なり
俯向いた 男 超越した 男

同

利生

今治

一風

兵庫

一同 蜂

松江

同行

石川

同 義風子

廣島

同 呂烈

高知

同 星水

大取

同 天國



放浪の旅兩足を抱く日あり
 内風呂の低く都々逸うなつてみ
 團らんは一切れづゝの壽しを喰ひ
 菜の花が外道のゆめすてむ
 傷魂をたへてゐる夜の灯へ黙し
 代書某札ぶら下げて娘と二人
 十五とか眉いと細くかきてゐし
 あゝ青春はむなし貧しき夢を見ん
 求職のあんなに窓に立つてゐる
 社長の威嚴の爲に叱られる

結婚して

出勤へ帽子と靴が揃へられ
 焚火する朝花賣りの愚痴を聞く
 足踏んでから娘吊革を持ち
 萬歳を見ても欠伸の出る男
 冷笑が巢喰つてるやうな紹介所
 理論的根據に飢えてゐる私
 金溜める程人間の薄情な

同

清美

野分池

同
 公平

今治

同
 輝親

神戸

同
 木通

鳥取

同
 法泉子

名古屋

同
 三八朗

大阪

同
 いの助

同

同
 寒草

同



風の日の駈けるを見れば胸をうち
 読んで居る一字を蠅にうばわれて
 子を抱けば子のにほひしていゝ月夜
 雲ひくゝゆふべの夢が想ひだせない
 退店

ふりむけばいまでなにをしたのやら
 生活はせめて川柳作る時
 別珍の足袋で鍍入り三日すぎ
 遮断機の向ふの顔が面白い
 親父から山も賣つたといふ便り
 いわし焼く煙の中へ部下が来た
 からすなくなよ妻が病んでゐる
 道頓堀素通りすれば風寒き
 波止場まで母見送りのバスに揺れ
 掛け給へ今日は社長のいゝ機嫌
 眞すぐに進む世間でないのなり
 生きてさへ居れば善い事あると言ふ
 催促の來ぬ日は氣味の悪い風

大阪

ライト

同

同

同

同

今給

十 静

奈良

同 朱金抄

大阪

同 自由郎

同

同 静波

同

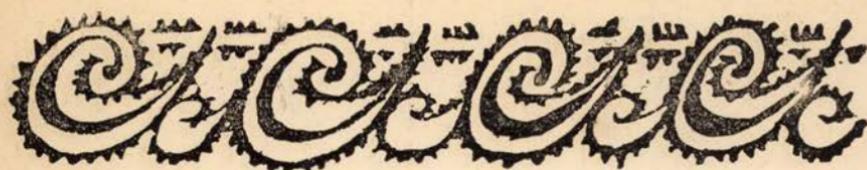
同 世間音

今給

同 比呂史

長野

同 玲翠



ギヤマンの時代を話す父の癖
 夢に見た豫感の人が訪ねて来
 針指の抽斗からもプロマイド
 浴槽で宵の思案がまたかはり
 年賀状にまちり履歴書戻つて来
 佛壇へ向かせ母親泣いて居る
 安來拳習ひ覺えて灯が戀し

初詣

玉砂利へ人人みんな日本人
 生活へかどから雪をけつて行き
 掃き出せば朝陽におどる埃の子
 義理故とそむきし人のうすき紅
 無意識に草引千切るラヴシーン
 寶惠籠の藝者白い襟を見せ
 頬骨の尖つたとこに泣きほくろ
 失戀の日記に秋の花は枯れ
 新妻の笑へば匂ふ髪の艶
 氣短な兄にも戀の日記帳

大坂

同 雅星

同

同 阜山

松江

同 砂夫

岐阜

同 飛春

大坂

同 鉛位

同

同 川芎悪ノ男改メ

名古屋

同 車前草

宇治山田

同 君凶

同



黒眼鏡してわからぬかと思ひ
 お悔みに忘れ形見の兒がなつき
 節分へ隣りは肉のにほひする
 金持になるのが母の希望です
 煤拂ひどれもこれもが煩冠り
 店の間が商賣人の書齋です
 長杵は雪の解けるをうれしがり
 食卓につけば人生有がたく
 天井を眺めて明日の日を祈り
 この足がこの手が淋し陽差しの床
 ふところのさびしさ三錢の湯にひたり
 黙慾の相手空虚な眼を見はり
 氣の小さい男紙幣から腫をそらし
 せつかちな團扇で待たす屋臺そば
 よく腹を立て、正直認められ
 迷ふだけ迷へと客の顔を見る
 灰色の部屋住みなれし黄水仙
 簀入りの反つて帯が氣になつて

松江 大阪 同 京都 高松 奈良 名屋 松江 大阪 徳ヶ池 島根 今治 勝戸 松江 大阪 同 八幡 東京

山川 兒
 たけを
 公 子
 正 祐
 柳 夢
 青 柿
 長 樂
 洋 々
 千 世 女
 美 智 子
 凡 愚
 文 庫
 勝 太 郎
 四 郎
 歌 都 路
 伊 紗 緒
 美 沙 女
 不 二 號



戀すてた瞳へ黄な沈丁花
 生活へ強く男の力癩
 父も年老いた病室にすわつてる
 朝風呂で會ふ顔玉つき場でも會ひ
 親しさが云はせる友の棚下し
 看病へ何時正月がすぎたやら
 節分の豆大望へ遠い音
 春の陽の背へ芝草ついてくる
 牛の息蒸氣機關のやうに出る
 酒をのむ俺でこんなに弱いのだ
 美しい娘には試問も念が入り
 ベナルテイー横木を越して雲のある
 懐しさ電話の時間が短かすぎ
 正月を去なぬ女工の故郷をきゝ
 かねの理想に遠い世帯持ち
 貰ひ子が貰ひ子と知るのを恐れ
 色術に育つて俺はやせる歳
 急ぎ足何が嬉しい片鱗

松江	愛媛	同	大阪	今治	愛知	京都	大阪	島根	尼崎	同	十三	大阪	神戸	同	大阪	松江	壱ヶ池
和朗	一服	鬼城	墨洲	流汀	美津女	光彌	耕峰	健芳	正柳	玉芳	琴泉	美千江	彦三	玉葉	以都女	氷月	豆樂



ノーチップ客の歸りに目もくれず
 風呂敷を抱いて不作の村を發ち
 格子戸も質屋としての艶があり
 萬歳師風邪をおして悲壯なり
 理性冷たく争の座に腕を組み
 ワイシヤツの課長もまじる計算日
 飯米に窮し封印切る哀れ
 三味線の座が白けてるポータブル
 相談に乗つてやらうといやがらせ
 瘦せ落ちた頬へ夕日が照り給ふ
 詠歌師の座り直してお茶供養
 傳説の池を眺めて櫻餅
 白百合も俺も淋しき知るものか
 馬車の上霜だけ乗せて稼ぎに出
 情熱を強ひる港の夜の風
 若草がふみにじられてランデブー

十三	大版	伯耆	松江	同	大版	癡ヶ池	十三	大版	愛媛	尾崎	同	大版	高知	金澤	癡ヶ池
嬌兒	水樂	希照	突飛	はるを	朱椀坊	錦雀	苦稔	清彦	草樓	文月	都會人	みのる	柳翠	立帆	吉之助

實例をみてゐる。

(376) 鎌倉で嫌らしいに成し夕間暮

省 二 鎌倉は古跡地丈けに閑寂だ。夕間暮の淋しさは一層である。

東 魚 五山の鐘が身にしみるのであらう。

秋の屋 單に寂寥を感じた而已か、何か特に嫌ふものが有るのか、漠然とした句である。

(377) 我膝を見て笑ふ病人

省 二 重患に罹ると、膝頭が無くなつてしまふ程瘦せる。

爲に歩行さへ出来ぬもの、私などは毎秋の體驗だ。笑ふ位になれたら家族も安神、俱に笑ふであらう。

東 魚 私はチブスを病むだが、やつと寢臺の上に据る事が

出来た時には、全く自分の膝をなさないやう可笑しいやら、變な氣持で眺めた事であつた。輕妙な句である。

秋の屋 此れは所謂微笑であらう。

(378) 乗掛へ伸上る茶はいさま

省 二 本馬に對し乗掛馬の名がある。人一人、布團、荷物等のかんりの重量のものを運むだ。馬の出立の用意も整つたところへ、伸上つて茶店女が茶を差出す。御無事にのいとま乞となる。

東 魚 伸上るのは茶を差出す人が伸上るのか。馬上から及

び腰に伸上るのか、何れか一寸わからぬ。「乗掛へ」だから前者であらうか。

秋の屋 旅店が茶屋の女が、馬上の客に伸上つて、茶を侷めるのである。

(379) ひやうきんな人の仕當る汐干狩

東 魚 頼冠りをしたり、遠慮もなく尻をからげたり、おどけ氣分の人が、大きな蛤でもとつて、喝采を博すと云ふのであらう。

秋の屋 剽輕者が何事かをして、喝采を博する而已でなく、妙齡の娘を背負ひなどして、意外の戀が成立するのではない歎

省 二 そこ迄仕當てなくて、句面丈けの汐干狩の行樂風景である。

秋の屋 如何にも、剽輕者などは、女の子に惚れられない方であらう。

(380) 元結の入らぬ女さなりにけり

東 魚 髪をつて仕舞ふか、撫付け髪かなになつてしまつたので、女と云ふ名ばかりだと云ふ、世を捨てた心持ちであらう。「なりにけり」に詠歎がある。

秋の屋 世を捨尼の體である。

省 二 追回がある。淋しさもある。

(381) 身をさまゝにひねる霜解

東 魚 霜解道を迂べらじと、身をひねるのである。「身を

さま／＼にひねるスケート」などは如何。

秋の屋ニ「さま／＼に身をひねる」とは、少し誇大で佳句と思はれぬ。

省ニ然り、八文字も使つてしまふのは工夫が足りぬ。スケートなら、「さま／＼」可ならむ。霜解の句は「ひねる」丈けで足りる。

(382) 度紋の良の矢に付て行

東 魚ニ度紋は揚弓に關した言葉であるが、詳にしない。句意は矢の行方へ傍觀者の目が追うてゆくのを、顔が付てゆくと云ふ風に詠んだのであらう。

秋の屋ニまだ能く調べてみないが、度紋とは矢取のことではない歟。

省ニ句解は東魚氏説通り。土紋とも書く。

東 魚ニ(追記)度紋は揚弓に關係のある言葉である事は申陳べて置いたが、偶然、繪本時代粧(豊國畫)を見たら、揚弓店の圖に、其軒行燈の正面に「土弓」其側面に「度紋、龜鶴」と書いてあるのを發見した。尙同圖の上部に張紙を下げた部分が描かれてあつて、度ノ字の下部と紋ノ字の字が書かれてある。さすれば度紋は、やはり矢取女の事を云ふかも知れない。

(再追記)。天保三年版行の岡山鳥作の「的中新話といふ揚弓塲を舞臺にした洒落本(まあ洒落本と云ふべきものが)の序文に

「唐玄宗皇帝か妃楊家深窓に遊びたるながれの末、揚弓土紋にことよせ、自慢の的の當不中を論じて滑稽を穿ち云々

とある。土紋は度紋と同じであらう。文中客の一人が高慢に講釋を述立てる一部に

ほんとうに射るにやア、わたい共のよふに數を取らねへで、とん取とから取じやアございませんか。

と云ふ矢取女の間に對して

あるにもなんにも、本紋合紋といつて、二人紋臺にならんで本紋は全くの矢數をとつて、矢割を呼び合紋は立一の紋ばかり取て、一と手／＼に立一を呼ぶのサ、今でも惣會その外清服射禮の時には本紋合紋とキツト兩人紋臺に座すべきことさね(中略)、もん取と唱へ来る古實はサ、むかし貴きおんかたのなさせられた時分に、矢順のかまひなく射込のことがあつた。そのとき矢見といふ者が御銘／＼の中りを呼だ、ソレ、不分明だての、ソコで權兵衛、八兵衛と名は呼れずに、ソコで御紋所を見て、三ツ巴のおかたをば三巴といい、車の紋のおかたをば半車と呼んだり……

とある。参考になりさうに思はれる。「揚弓射禮蓬矢抄」を本屋の店でのぞきましたが、どうも度紋は所謂撞球のゲーム取の如きものらしく思はれます。併せて追記。

秋の屋ニ度紋といふものの正體が略明かになつた。昔の揚弓塲の度紋は、現代の鬪球場に於ける、女ゲーム係に、等しいもので、揚弓を引く者が射つてた、矢數を調べる女である。「狂歌角力草」天明四年出版の狂歌集より二首を發見した。

土 紋 戀

もんとりも手にふり袖の揚弓にあふかながひぞうまい中ほこ

百 足 子 金

まるわたる矢とりを戀のつきはやにやうきうな場で袖をひき

弓 歌 舞 妓 工

この狂歌は拙劣であるが、矢取女を「もんとり」とも稱したことが判つた。亦「土紋」といふのは、土弓場の紋取りの略語であらう。

(383) 泉水を挑灯で見るとまを

省 二 話がはずむで暗くなつてしまふ。庭園も話題になり、

デ挑灯つけて泉水の邊を見せて貰らふ。そしていとま乞する。

東 魚 一寸場合が分らぬ。泉水と云へば庭だらうが、庭から提灯で辭去するといふ場合が胸に落ちぬ。

秋の屋 水戸家の後樂園、尾張家の外山屋敷等のやうな廣庭

を、觀覽して辭去するのであらう。

東 魚 成程お庭拜見なれば、合點がゆきます。

(384) 手代まで蚊を疵にして内に寝す

省 二 寝ない理由に蚊がなるとは面白し。本所の手代などは然らむ。

東 魚 「夏の月蚊を疵にして五百兩」其角吟を背景にしてゐるのだらう。

秋の屋 賛成。

(385) 来た先を聞はあわれな拂物

省 二 質物でも色々聞けば哀れである。況んや拂物となつて、使者から事情を明されては、一層哀れさが増す。

東 魚 持主の昔が忍ばれて、一入氣の毒な心持ちのされる事である。

秋の屋 双釵か鏡か。

(386) そとは小町も言懸りなり

省 二 七小町の一つの卒都婆小町。卒都婆に腰うち掛けて坊さんに言懸りをなし、後で教化をうける筋だ。「そとばには口に借金せぬ婆ア」。

東 魚 言懸りに諧謔味がある。

秋の屋 大伴黒主には言懸りをされたから、その意趣返しとも思はれる。

(387) 檢校の咄の下卑る年忘

東 魚 結局は咄が金の事に落ちて、今年も何程金が延びたなどと言ふので、寧ろ檢校ともあるべきものが、下卑ると云ふ穿味の句である。

秋の屋 黄金に目のな同士であるから、酒に酔ふても貨殖の事は忘れぬ。

省 二 それでは本當の年忘ともなるまいが、イヤ金の話が年忘なのだらう。

(388) 橋を限りに歸る抱守

東 魚 〓 散歩でも何にか、目あての處があるものである。夜店のはづれ迄行つて引返すとか、神社の處迄行つて返るとかするものであるが、子守が橋迄行つては又家の方へ歸ると云ふので、習慣的になつてゐる趣か見えて面白い。(橙黄氏に「春寒や郊行返へす亭を得たり」がある。同じ様な心持である。)

秋の屋 〓 私が孫を抱いて、朝夕散歩する時にも、同じ處まで行つて歸るのである。

省 二 〓 毎日の子守は、自然と足の向く方角が、定まつてしまふものだ。「橋」であつて感じもひそむ。

(389) 出る戀に内へ來ル戀摺違ひ

東 魚 〓 場台が分らぬ。恰も戀文を出したと同時に、先方からも文が來たと云ふのもあらうか。前句あれば判断も何んとか付かうか。

秋の屋 〓 離別されて出る女房と、その後釜に据る女とが、道路で摺違ふのではない歟。

省 二 〓 適確に解釋する手がかりが、句面には出て居らぬ。

(390) ついへな良の多い正月

東 魚 〓 朗かな遊び氣分の顔が多い。誰もが錢を散する顔付である。それも正月氣分だとの心持。

秋の屋 〓 有閑婦人などは、殊に冗費が多からう。

省 二 〓 お正月は皆ついへな顔であらう。イヤついへなどと思はない、顔なのであらう。

(391) つまむほと寝て明るはつ春

省 二 〓 据風呂に居るうち春になつて、寝ぬものさへある位だ。つまむ程ねて迎春の氣分となる。

東 魚 〓 「つまむ程」と云ふ言葉が、氣がきいてゐる。

(392) 氣のつかぬうち通ルのり物

省 二 〓 一寸した間に乗物は、通りすぎてしまつた。「乗物」であるから、「氣のつかぬ」が働いて居るので、その乗物の人物は、前句に關聯する。

東 魚 〓 何あんだ、さう云へば今通つたのがさうか——なんと云ふ場台はよくある事だ。

秋の屋 〓 横町の伊勢屋へ、今夜嫁が來ると聞いたが、まだ駕籠はみえないが、何もつ通つてしまつた、といふ場台と思ふ。

(393) 鏡研顔に飽れは日かくれる

省 二 〓 自分の顔がよく寫れば寫る程、よく研げたのだから時間もかなり日暮ともならう。一日に何軒も廻つて、斯くして日暮となる。遂には「我顔に見飽きて加賀の國へ行き」

東 魚 〓 所々方々で鏡を研いで、今日も顔を見飽きるやうになると、日が暮れる事であると云ふのであらう。

秋の屋 Ⅱそれが髪に霜を置いた顔ならば、日暮れて一人撫然とするであらう。

(394) 日本金のうこく晴天

省 Ⅱ晴天は角力興行をさすならむ。

東 魚 Ⅱ日本の金とは、立派な金、見事な金、と云ふ心持であらう。前句に因て晴天で角力を現したものと考へられようが、これ丈けでは如何であらうか。朗かに商賣が取行はれると時代を讚美した意味ではなからうか。

秋の屋 Ⅱ江戸の日千兩の中へ、相撲を除かれたのは、如何なる理由である歟。

省 Ⅱ私も「晴天」に就ては、大に考へた結果、角力を咏むものに、晴天があるから、さしづめ、そう解釋を下したのであつた。

東 魚 Ⅱ角力が日千兩に入らなかつたのは、年二期の短期間に限られるからであつたらう。然も外に數よく三つ揃つたから尙の事である。

(345) 妾のふりはこまるふり付

省 Ⅱお妾の振付となると、感じを出す上に、一ト工夫を要すといふにや。

東 魚 Ⅱ妾が何か餘興に、俄仕込みの振事を演らうといふに

振付けが困りきるのであらう。下地のない卑しい成上り者が想像される。

(396) 秋の屋 初午祭などの餘興に、芝居か手踊を演するのである
なふり次てに聲の弟

東 魚 Ⅱ聲ときまつた人を、からかひなぶる次でに、この次ぎはお前さんの番だと、弟をなぶるといふので、和やかな氣分の句である。(柳樽に嫁にゆく人の妹をなぶる、との意の句があつたやうに思ふ)

秋の屋 Ⅱ聲の弟を、嫁の妹としても聞える句だ。

省 Ⅱ普通なれば、嫁の妹の方が、感じに合ひ、さういふ場合が多からう。前句事情ならむ。

(397) 洗粉の身を逆様に摺みかき

東 魚 Ⅱ「鶯の身を逆さまに初音かな」(其角)を背景にしてゐる。尙、鶯の糞は洗粉に混入して、効果があるといはれてゐる。それをもバツクとしての句構である。

秋の屋 Ⅱ身を逆様に手水を遣ふ圖は、歌川派の浮世繪にある前説の如く「身を逆様に」で、鶯の糞を利かせたのだ。

省 Ⅱ洗粉とか糠袋とかを持出した、古川柳は見受ける。さうして目鼻をつまみよせたりなどは、餘りに平凡な寫生だ。流星は其角の作を踏むで居る丈けに、活躍して居る。

日本名所名物川柳

(東京の巻)

前田雀郎選
宮尾しげを畫

二 銀 座

團體旗銀座の畫をものたらす

久米雄

朗らかな戀は銀座で別れたり

葉光

スクラムは未だ飲むといふ銀座裏

輝親

引揚げる一家銀座の灯へまはり

某人

せつかちな父とつまらぬ銀座の夜

葉魚

酔ざめに月一つある銀座の夜

霞舟

銀座にも番地があつた裏通り

照坊主

ネクタイがほしく銀座を歸るなり

正明

應援歌銀座の人に見返へられ

木履

隣りの娘銀座で會へば話せそう

紀太

稽古木畫の銀座を斜に抜け

新水

ビル退けて銀座へ放たれたる若さ

青柿

ボクサーと銀座へ歩るく丈に来る

史葉



上京の夜を銀座の雨に逢ひ
 ふところ手銀座の夜の人の顔
 銀座の灯ヒヨイト背中を叩かれる
 朝の陽へ閑な銀座の道普請
 朝やけの中に銀座の向ふ側

楚堂
 小一洞
 佐保蘭
 三千人
 一彌

窓からも見える銀座にあきてゐる
 人の子も連れてフトゐる銀座の灯
 卒業へ銀座を歩く服が出来
 尾張町電車てつまらなく歸り

同
 欽也
 一風
 みづゑ

○投句募集

東京の巻(四)

「浅草」三句

〆切 四月五日

宛先 本社事務所

用紙 ハガキ

櫻と柳樽

西田 艸 樂

花の王けづるも王へ忠義也

無論此の句は、兒島高德が櫻木を削り、「天莫空句錢一時非無茫蠹」の詩を書き印し後醍醐天皇を御慰め申した事を詠んだのであるが、花の王として、單に花とした日本人は櫻を稱する事現今では怪まぬ事になつたが、上代の文中には梅を以て花の王となした例尠なからずその何時の頃から櫻を花の王としたか判然しない。何にしても、小倉山で百人一首が編まれた頃にはひどく、櫻の名歌の多いのは、

百人は言葉もかけぬ花の兒

であり歌が一首も戴つてゐないのは淋しい。従つて梅が花の王位を櫻に譲つたのも相當に古い一斑を知るよすがでもある。

何と云つても、その開花時の氣候はよし、絢爛の美、散り際の潔よき、日本國民の精神と趣味に適ひ花王に推される資格は此の花にあるのである。故に古來櫻花を詠じた詩歌は數限りなく、梅を好文木とせるは支那の古實であるが日本では當に櫻が好文木である。従つて、川柳に詠まれたる句も、他の草木に比して恐らく櫻が王位を占むるもので

あらう。

私が貧弱な知得より櫻の古句を調べたものだけで三百句に近い數に上る。そのうち一番多いのが吉原の夜櫻と吉原年中行事に出て来るもので、百數十句ある。西原柳雨翁の「川柳吉原志」に登載されてあるから一目瞭然である。

古句を研究してゐる人々は、あまり珍らしいものではないが、少し櫻の古句を拾つて簡單な註譯を附けて見ることが、強ち無駄でなからうと思ふが、吉原の夜櫻だけは、あまり句が多いのと、句を見れば大概それと察せられるのが多いから茲では敬遠して置く。

書出しに兒島高德の句を引出したから、その關係句から始める事にしやう。

三郎は筆で毛虫をはらひのけ

落書をしたで高德名を残し

諫言の文字は櫻の木へにじみ

巡禮の様に高德書いて居る

高德は筆の先にて蟻をよけ

櫻木にちんぷんかんを書いて置き、

まだある。皆讀めば判る句ばかりであるが

高德は魚に酔ふた振ぞ書き

の句に少し説明が要る。

鯖、鱒などの腐敗に傾いた魚はよく中毒して蕁麻疹を起したりするが、これには櫻の皮を嘗めると治ると昔から言

ひ傳へられる、今ならもつと的確な療法があるが、兎も角右の句がそれだ。就ては此の中毒と櫻の皮に關する句があるから參考に挾んで置かう。

酒は梅魚は櫻で酔ひがさめ

吉原伏見町の醉ざましの賣薬、「袖の梅」も柳界に賑かな事だが、魚には櫻の皮が醉ざましで、

あす來たらぶてと櫻の皮をなめ
が一番はつきりしてゐる。

人は武士花は櫻木とは誰が言ひ初めたか、平民紳樂には
ありがたく思はぬが、武士道を鼓吹した言葉としてなら平民にも武士道は守れる。小櫻絨の鎧を着て、馬上豊かに一陣の春風に吹雪と散る櫻花の美に打たれて、しばし馬の足搔を止め、

吹く風を勿來の關と思へども

道もせに散る山櫻花

と詠じた八幡太郎義家の名將振り天晴なる姿そこはげに花と人との理想の美を賞さでは措けぬ氣がする。

小櫻を召して勿來の花吹雪

縁語結びの狂句として捨て去るには惜しい句である。他に義家の名歌に關する句が見當らぬを淋しく思ふ。

義家は源家、平家にも櫻を愛した花も實もある武士がある。身は都を落ち延べ西海に赴く勅勘の身ではあるが、薩摩守忠度こそは文武二道に勝れて史を繙く者に懐かしく、

さゞ波や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな
行き暮れて木の下蔭を宿とせば

花や今宵のあるじならまし

の二首、その千載集に「詠人知らず」として登載の一條、詩人の心を思ひやり一鞠の涙禁じ得ぬものがある。

忠度は麓で七ツ半を聞き (行き暮れて)

忠度は木賃も出さず宿を借り

櫻木をはたごやにした名歌也

山櫻都の人に宿を貸し

一八旅をとめて櫻の名が高し

花も主になる歌の徳

忠度の夜具は櫻の總模様

身のしがを隠した旅宿の花を詠み

千載に日かげの櫻一本入れ

朝敵のしがを隠して集に入れ

名の知れぬ櫻千の集に入れ

千載に日かげの櫻取り残り

皆狐川より引返して、藤原俊成に託した歌に關する句である。

腕のある中に櫻の歌を書き

一の谷の戦は勝ちほこれる源氏の勢に一本のよく大厦を支へ得ず岡部六彌太を組敷きながらその郎黨に右の腕を切落され、遂に自ら屠腹の最後も憐れである。

舊都の名歌八重櫻山櫻

忠度の志賀の都の山櫻と伊勢の大輔の

古の奈良の都の八重櫻

今日九重に匂ぬるかな

が此の句の内容だが、伊勢大輔の百人一首に關する柳句には、ちやらつほが多い。

九重に詠んで名高い八重櫻

御所近く匂ふ名所の八重櫻

八重櫻鹿の晝寝の上へ散り

など、

大和の櫻山城で伊勢はほめ

正に詠歌の時代は平安朝であつた。

その他、櫻の句としては、江戸城櫻の間、内外櫻田門、

鶴退治の頼政の手傳をした猪早太が左近の櫻にぶつかつた

といつた、つまらぬもの、松玉、梅玉、櫻丸菅公と關係あ

る句「鉢の木」佐野源左衛門の松梅櫻等句と解説をつけて行

くと、單行本が一冊出来そうであるが、

櫻木へ埋木をさせる御立身

此の句は江戸史を知らんとす人が知つて置いていゝ句で

ある。武鑑に載る坂木は櫻の木で造られたが、武士が出世

をして大名になると判が楷書に變るので櫻木に埋木をする

こといふのである。その類句に、

須原屋の櫻木に載る人は武士

がある。日本橋通二丁目須原屋茂兵衛が版元。

眞面目な櫻そのものを詠んだ古句は、

賣溜へ櫻のかゝ玉子賣

鏝療治櫻の下へ呼んで來る

位なもので、當時の花見が出てゐる。

櫻名所

綿谷摩耶火

1—東京の櫻

東京の櫻名所は何處々々ぞと云へば——指を先づ上野、

飛鳥山、小金井、荒川の四個所に折るであらう。だが、是

は今の話。

舊幕時代の都人主は、先づ隅田川、上野、飛鳥山、御殿

山と數へた。

下總の花を江戸ツ子自慢する (文政)

去年見た花を湯で飲む隅田堤 (同)

は隅田の櫻。

花の山鬼の門とは思はれず (安永)

年號が櫻の上によつと出る (天明)

は上野。年號と云へるは寛永寺の後水尾帝御宸筆をさす。

飛鳥山毛虫となつて見限られ (寶永)

御殿山芝の響に花が散り (天保)

芝の響は、増上寺の夕鐘。

右のほかにも、淺草奥山の北に千本櫻といふのは名高い

が、これは早く枯れて、

いつちよく咲いた處へ幕を打ち

の寶曆代以後の川柳は未だ見ないやうである——尤も此の

千本櫻は、ズツと後世の安政に到つて復興の擧があつたから、その頃の狂句には咏まれしものがある事と思ふ。

江戸の花見として、最も別趣と云ふべきものに、吉原の夜櫻がある。これは毎年三月中旬から四月上旬まで植付けらるもので、散れば抜いて仕舞ふ。

花の山より面白い花の里 (天明)

一國は入相からの櫻なり (安永)

花迄も宵つ張する仲の町 (同)

など其れ。

女房へ嘘つく櫻咲にけり (ケイ、三)

女房に啜つく櫻咲にけり (武玉、十七)

女房の知らぬ櫻が咲にけり (ケイ、十八)

と、以て罪な花たるを知るべし。

小金井の櫻は多摩川上水の保護林として夙くから植付られてゐたが、昔は交通不便のために遊士がなく、古句も見付からぬ。此處へ都人士が盛に杖を曳くに至つたのは今の中央線(もと甲武鐵道)が通じて宣傳された結果なのだ。

荒川の櫻も亦遊士を牽くに至つたのは餘り遠くではない何しろ路のりが遠いので、明治頃でさへ未だ餘り注目されなかつた。此處が有名に成つたのは、荒川放水路の工事が初まつてからである。

もう一つ遠い市川堤も、現今では仲々遊士を牽いてゐるやうだ。千葉縣三里塚の櫻も亦近來特に東京の花見から除外する事は出来ぬやうに成つた。交通の至便は都人士に多

くの遊び場所を提供する。野火止め平林寺の櫻など、もう少し注目されてよいと思ふ。市川や三里塚よりもグツと近いし、まだグルリには昔の武蔵野らしい名残りもあり、寺そのものも古風で大きく、末だ俗塵に染まつてゐない點は殊に嬉しいものである。

2—櫻と鐘

櫻と鐘の取合せは古來の約束で、もはや月並——月並以下でさへもある。

彼岸櫻の半鐘に散 (不斷櫻、初)

筆拍子、一に「世人いふ、入相の鐘をつけば其鐘の響きに花を散すものと心得、又は俳諧の發句に、入相の鐘つく坊主を憎めること、きぬくの鐘に百倍せり、云々。」然し

鐘撞の櫻の中へそりかへり (ケイ、四)
は、座五のユーモアで幾分救はれてゐる。

かねつきの反るも四手のそり加減(むつ)の花、乾かねつきの力もちほどそり加減 (同)

反から先へ習ふ鐘撞 (武玉川、初)
等、關連的に並べて置かう。

葉櫻の科は隔てる鐘の聲 (同、九)
櫻は散れど鐘のない寺 (寶の帳)

等は其の約束を裏に置き乍ら幾分批評的な強さはある。

鯛れうるあたり入相程にちり (明、和)
になると、櫻鯛の名を隠して、その鱗片の散るのを入相の鐘に散る櫻の花片に見立てた狂句仕立てであるは云ふ迄もなからう。(十年三月十八日しるす)

花魁のさびしさを帯の金の糸

月評 街の高臺

西田 艸樂 山本 丹路
吉田 水車 福田 山雨樓

(前號近作欄より)

花魁のさびしさを帯の金の糸

艸樂

山雨樓——懐古的な句。しかし歡の匂ひもしなげれば夢効的な幻感感もない。あるものは帯でありその帯の金の糸である。斯くしてこの川柳は花魁と云ふ華美な存在へ、はるかなる思慕を送つてゐるのである。と同時に花魁の全貌を百爛の下に据へて、まばゆひ程の凝視を向けてゐるのである。

艸樂——何分時代放れた感じを受ける。そし

て「さびしさ」なるものも、なま／＼しい淋

しさは出て來ぬ様だ。句の形からは歡の匂ひ

はしないが、あり易い古句を近代向の表現に

直された風な疑ひが持てはしないだらうか。

水車——ぎこちなさか下五の邊にある、艸樂

氏解に賛成。

丹路——讀してよろしく、再讀してなほよ

ろしき句。金の糸とくによろし。水車氏のき

こちなさか下五にあると云ふ説はむしろ「の

」が三字重なつてゐる邊にあるのであらう。

散髪屋師走の頭ねむむける

天秋

艸樂——十二月、師走といった句材が大同小異の穿ちに落ち易い、又か!!といった眼で看過する事に馴れてゐる。此の句だつてその點から多くはみ出しては居ないが、私は「ねむむける」の文字もよく利いてゐる事を看過出来なかつた。實際私は師走も押追つた日散髪で頭をれじむけられた。何しろ先着順に番札が渡されるといふ混雑の折柄で、苦情は言へなかつたが、あ々云つた場合理髮師の手觸

りが自然度を外す事になる。ピンと来る質感句である點を探つた。

丹路——「師走の頭」はいゝ。併し餘りに川柳らしい川柳に終つてゐる點が物足りない。川柳はこゝから出る事は必要であるが。

山雨樓——師走の心理をよく掴んだ句である。客の方はせめて髭を當つて貰ふ間など現實から逃れやうとして、盗閑のうたゝれをよるこぶ。これに反して散髪屋の方では一分でも早くビツチをあげて多客を捌こつとあせる。れじむける、と云ふ下五のうまさには思はず三嘆を禁じ得なかつた。

水車——こちらも濟し込んでゐるだけにおかし味が湧く、下五の叔法と中五の省略法に成功してゐる。

呼鈴は商人の押すものでなし

梨生

艸葉——表口の呼鈴なるものに、時には反感が込み上げる事がある。頼まう!!ドレ!!といった昔に生れて來なかつた事を悔んでゐる僕にはだ。表の戸が締つて居ても、戸の外で二三度も頭をさけて、何々屋で御座いますと中からの返事を待たねばならぬのが、商人の悲しさである。確かに屋内の人を呼ぶべき呼

鈴であるが、押し兼ねる商人の態度を詠み得た巧みさを見のがし得ぬ。

山雨樓——この句も警句張りである。そしてよく穿つた句である。

水車——理屈的になつてゐるのが惜しい。

丹路——そのくせ呼鈴を最も利用するのは商人であるんだが。

たゞ一人父の遺骨に舌をあて

浮鬼

水車——場所と人物にやゝ難解の點はあるが、父を亡つた私として教へられる句である全體が引きしまつて嚴肅の感に打たれる。骨揚げの處であらふがそつと味つた骨の味、又最後の訣れの口づけ、肉親の情としてうけとれる。

丹路——「舌をあて」と云ふ感情が理解しにくい。これは私だけのことも知れないが、下五を全然換えてしまひたい程「舌をあて」は「父」に對してふさはしくない。

山雨樓——さうだ、多少變態性を帯びたときへ思はれる仕事であるが、骨肉の情がこの句の眞實を貫いてゐる。再讀三讀、僕はこの句を肯いてしまつた。「たゞ一人」がよい表現だ。

艸葉——如何に父の遺骨だとて舌をあてるなんて事は、古今未曾有だらふ。「焼いて粉にして白湯に呑む」のは俗話の文句にはあるが、此の句はそんな呑氣な場合でない。それにしても「たゞ一人」と斷るまでもない。たゞ一人は多勢でお骨上げかなんかの時に、父を亡くした者の、誰にも勝つて悲しみ、死別の情が出て意表外の行動となつた譯だが、それなれば、此の上五にその場の情景でも詠つたら、此の飛拍子な出來事が、もつと自然に聞えたであらうと思ふ。

激論の火箸底までつき通し

宵明

丹路——激論の何であるかは問題でない。底までつき通さずに居れなかつた人間の顔が句の表に浮びあがつてゐるから愉快だ。第三人者から見れば、何でもない出來事の一つであるかも知れないが、この火箸だけはまさしく人間味の一端をほゞえましく思つてゐたに違ひない。一讀所謂詩味に乏しいかも知れぬ。併しこの川柳味の後に胸にひびいてくるものがある。川柳味が單に川柳味で終つてはならない。そんなことを思はせる句だ。

山雨樓——上五の生硬なそして抽象的な表

現が、この句のつつつきを大變損な立場に置いてゐる。と云つて「論をする」「言ひ募る」「言ひ込める」などに置き替へて見てもその作爲の露をカバ、することは出来ない。穿ちの句であるが鋭さは追るものがある。

水車——新しいとは思へないが、突き通しが誇張らしい

艸樂——下五は強く迫るものがある。三月號の中では目立つた句の一ではある。が、何といつても上五の抽象的の文字が、シーンを生かす上に於て多大なる損失のある事は惜しまれる。

蕪んで居る眼へ酔つてつきあたり

吉左右

艸樂——酒呑本性を違へず。酔つて居てもごつかに本心を失はない。

カイ、いやに納まらない。どうせ俺達はしがない呑んだくれさ!! 半ば酒が言はず強さと、ごごかに失ひ切れぬ本心が覗いて居る複雑な感情を手取る如く讀まされる。

山雨樓——或ひは言葉に出る以前の零圍氣

に、より凄い視線の交錯があつたのかも知れない。下五の表現がその邊の重苦しい空気を叙し得てゐる。宴會なごの一點景か。

水車——普通な句、あるが、弱き者の味方は常に蕪んで居る。「蕪んで居る」のは其場限りではないのだ、酔ふたまされにせめてやりか

へして置く。

丹路——まさしくこんな酒がある。と酒呑をして感心させる句。

大空のどこへ不平をもつてゆく

朝雨

水車——おそらく作者自身の心境であらふ。何か教へてくれる大空であつても、それすら眼に入らぬ時がある。不平のやり場を大空へもつて行き得た人は、或は幸福かも知れない。主観の客観化である。

山雨樓——句主はまだ幸福感に達してゐない。低迷の姿が察せられる。しかしそれだけに句主の態度に眞剣なものが窺はれる。「どこへ」を「隅へ」としたら嘘の句に包み込まれた事であつたらう。

丹路——句のごごかに甘い感傷がある。かうした句はいつそ象徴にまで高めないと思つて追つて来る力がないと思ふ。或は大地にしっかりと根を下すか

艸樂——そうですね。象徴に生かすべき句であらう。

鼻をかむ男、男のしむを寄せ

久米雄

丹路——この句にはなか／＼しむい味がある。成程川柳と云ふ語があるが、それを脱して奇妙な味を發散させてゐる。この味は説明

し難い味であるが、決して悪い味ぢやない。艸樂——閑生氏に「女にも咽喉ぼとけがあるソグダ水」少し違ふか知らないが、たしかこんな句があつた。川柳家は剽那の川柳味を逃してはならない。敏感な句だ。

山雨樓——感覺をねらつた句である。顔面神經のざらめ動作が、かなりゆがんだものになつてユーモアを發散させてゐる。それを捉へたのだ。男を疊みかけた手法もこの場合面白いと思ふ。

水車——細い見付け、聲語法のかわつたゆき方と男性的なるものをおもはせる。動的な句としていたゞける。

小作らの三人 寄ればふりむかれ

尼花

艸樂——資本家と労働者、地主と小作人場所と事柄は違つても、同じ感情に支配され易い立場に變りはない。工場角でひそひそ話したつて、ストライキの相談とは決まらない。小作人だつて三人寄れば免滅の協議とは定まる譯ではないものを、いぶかしく振り向かれては田圃の平和にひびも入り易い。人の世の葛藤を覗かせてゐる。

山雨樓——中七の「寄れば」は未然影、假定形のやうで捕捉し難いものがあるが、さりとて「寄つて」或は「寄りて」にすれば言葉の含蓄が薄らぐ。殊に下五においてはつきりと

した現實感を興へるから 中七はこれであらう。

水車——私も此句を推した、三人と決めたのが常套的である。此場合二人でも三人でもよい、心理を描いて遺憾ない。

丹路——「三人が酔へば三人らしくなり」程「三人」と云ふ言葉が働いてゐないが、下五「ふりむかれ」が句の焦點としてあるんだからこれでいゝと思ふ。艸樂氏同様佳句と思ふ（前號川柳塔より）

態と貧乏してゐるやうに言ひ

雅幽

水車——かなしき小人のつれである、言ふて満足してゐる我々ではないか、つまらんつまらんと言ひふらして歩くそのくせ何の工作をもしやうとせないのである。むしろ態々ふれて歩くすがが見えてゐるやうである、作者の態度はいたづらなかなしみではなくはつきりものをみきわめた結果であるまいか。

山雨樓——金を溜める方法を知つてゐながら、わざと浪費をするのは君達の我儘と勝手に、資本家の構つてやる法はないのだ、と空嘯いたことに對して、作者の川柳が働いたのではないか。叙法がぶつきら棒過ぎて疑點を粧む。

丹路——老巧な雅幽氏の句としては、少し投

げやりすぎてゐる。内容も叙法も。併しそれはそれとしても足を踏みとめさすものがあるのは、句主が人生的的確な批判の眼を下してゐるからだ。

艸樂——雅幽氏の句に批評する事は恐れ入るが、無遠慮に言はせて貰へば、此の句の様な場合は、せめて古句の場合の様に「書きんした」といへば遊女の言つた事が解り「仰せられ」といへば目上の人の言葉と解し得られる。句がぶつきら棒で、そついつた技巧が、無い事は物足りなく思ふ。

うらゝかな日和乞食へ梅の塀

某人

山雨樓——ユーモリスト某人の顔が、ちらりと見られる句。この句は麗春と乞食と梅の三部曲で、戯曲の序と云つたやうな舞臺を連想せしめられるが、只そこに一字「塀」と云ふ塀をおいたことによつて、俄然見事な脚光を浴びることになった。

丹路——樂観もこゝまで樂観すると厭味がなくなる。それから叙法の點であるが、下五「梅の塀」はすぐれた表現だと思ふ。學ぶべき表現手法だと思ふ。

水車——梅は姿の大部分を主に背いて、塀からはみ出してゐる、乞食は何れにも背くものがない、見えるものは皆よい意味での自分のものであらふ、手法の點同感。

艸樂——某人君はよく、川柳のコツを吞込んでゐる事を、此の句に於ても認據立てられるが、時にはコツに囚はれ過ぎる事があつて、句の巧みさのみに走りぬ様に警戒して置きたい。此の人の課題吟など見てゐると、實に巧みに、何處からでも川柳味を拾つて来るが、鋭さとか、深刻さといつたものに乏しい事がある。今後の川柳にはどうしてもそんなものがないと物足りなくなつてゐる。

春の帯花粉をつけて踏るなり

没食子

水車——かわつた取材としていたゞく。斯ふした方面の開拓も必要である。自然に對する川柳眼、艸樂氏がいつかは言はれた様に艸木をもつとみるべきで、俳句のみに許される譯ではない自然界、自然界とはなれることの出來ない人生、強ひてまげる必要もないが、人間の姿をもいつはらず表はすのが、川柳の使命である。

山雨樓——清新味はある。しかしこれは柳俳の峠でうるついでゐる句だ。もつと川柳になりきる事が可能であらうし、必要でもある。丹路——山雨樓氏說に同感。そして單な描字に終つてしまつてゐる點が物足りない。

艸樂——春である喜びは出てゐると思ふ。但し今一步その點を強めぬと、確りした柳味がつかめぬ恨みがある。

春窓懷古錄 (上)

里「かほるさんあんたやつぱり炭屋町で生れなはつたんやなあ」

か「へーおほきにおかげはんで」

里「いつべんもまだ宿替へしやはりまへんなあ、三十年ほご前の話しまよか」

か「さいなあ、親分そらちつと殺生だつせ」

里「そやけどあんたかてもう七ツ八ツになつてなあるが」

か「さうだつたか一寸待つとくなははれや……ほんにさいな」

里「ほれあの、宗衛門町なあ、濱側に家なかつたん知つてなはるか」

か「へエ」

里「なんし、戎橋から丁度今の千年町あたりまで家おまへなんだ」

か「濱側……」感慨深い瞳。

里「今の相生橋の「芋仙」の門に桐の木が残つただけだんなあ」

か「へエそうだア、なんでもあんなキントクのやうな自動車の入れ物みたいなもんおまへなんだなあ……あ、そうだ、そうだア、おしめ繩を張つとまんねんな」

里「それと戎橋、へて電氣ニユースの中から柳の木がニヨコ〜と出たるだけだんなあ」

か「そうだ、そうだあ」

里「丁度今の小公園みたいな具合で小供が仰山遊んでましてん。ようヤンマとりに行きましてん」

如月末の二日里十九居にて語るところのかほる、里十九兩氏は大阪生へ抜き、しかも島の内の生ッ燈子が記憶のセントを三十年の昔に合はせて、凡そネオンの灯には遠い懐古談に早春の夜の更けるのを忘れた。艸樂、豆秋、夕鐘、禿山の諸氏と水車が、オアサアザアとして出席時々ユーモアを飛ばす。會話の純大阪辯は扮飾せず其まゝとする(水車記)

か「あ、そうだつたか」

里「まあ、あんたやつたら籠持つ方だつしやるなあ」

か「いゝよ、わてあんなヤンマとつたりすんのきらひだつきかいにうちにちいとしてましたらなあ、ほんなら兄いやんがなあ、すうと湊町までヤンマとんに行きましてん里十九さんあんたも行きはりましてんな」

里「そを〜そない言ひなはつたらあの湊町あんな電車道あれへんし、山雨樓はんの居やはる保線事務所もあれへん

し丁度あの邊に柳の木が五、六本あつたり、一寸西の方に五、六本あつたりそこらは草が生へたあつたり、今とえらひ違ひだんなあ」

か「そない言ひなはつたら思ひ出しま、あの深里橋の下を蛤とりに通つて行きませす時なあ柳、ざらつとたれてましたを思ひ出しま」

禿「ほんになあ、そないに言ひはりますとあの向ひの加賀の屋敷前もだらんと濱へ下る草の土堤に柳がありました荷車を曳いて冗談して車を濱へ込らしまして往生して居た時角力とりに引き揚げられた事がありました」

か「そうだつか大黒橋の北詰に角力取下駄屋がおましたさかい」

里「そう〜大きな下駄の看板上げておました今でもあのへん、それあの涙何やら餅言ふのん今でもおまんなあ」

か「漬芳餅へい〜おました〜、今迄土用の餅と言ふと皆向ふへ買ひに行きましたなあ」

里「そうだんなあ」

禿「ふらい西へ行き過ぎましたよつて東へ戻りまよか」

里「そうしまよ、あの戎橋の南詰今の柴藤やらライカンのあるとこ、むこもやつぱり一と抱へもある柳が五、六本おましたんや」

か「里十九さんみんな柳ばつかり見てはつてんなそやさかいやつぱり川柳のおうげがおまんねやなあ」

禿「なるほどそない言ひはると今も交番所に柳が一本風に吹かれて道頓堀川の水をながめて居まんなあ」

里「そうだあ、向ひ側へ渡りまようなあ丸万のうごん屋おましたやろ」

か「おました〜」

里「なか〜有名なもんで田舎の人はえ料理屋より大阪へ行つて丸万のうごん喰べた方が自慢らしい、話を聞いたことおます、其隣に丸万半助と言ふ宿屋があつて首の細いおつさんがあてはりましたなあ」

か「そう〜半ぼん〜言ふて」

里「そうだんなあ、あの人えらい極道

やつた相だつせ」

艸「あんたみたいなあ」

か「そやさかいに話が合ひまんない」

里「無茶言ひなはん」

一同突聲、

里「其時分に橋の上に氷屋が寒氷〜とお客を呼んでましたなあ、涼み床几置いて、今やつたらたしかに交通妨害だんなあ、なんなら道頓堀へ出まよか」

艸「其時分芝居の木戸、一つたい何ん位してましてん」

里「そうだんなあなんし古いこつてしつかりしたことは判りまへんが、こつて冷へた茶を一と息呑んで、

里「芝居の入口に丁度風呂屋の番臺の様なものがあつて五分厚に二寸五分六七寸長さのかまぼこ板の兄いさんみたいな札に「通」と書いたのを五十枚ほど上へならべて坐つてました、がそれを持つてうちらへはいるとそれを渡すと、お一人りきさん御案内いッ………それで平場の一番後ろの方か二階の一番後ろの方で成駒屋の芝居で通り十銭下足敷

物二錢位やつたと思ふてます」

紳「其時分は朝早うから今みたいに並らんで居たんだつか」

里「ならべしまへん、先きへはいつてましたら其場のお金をとりに來まして今みたいに等級はおまへなんだ、つまり上割とか棧敷出孫、木戸錢だけのお客は追ひ込み言ふてましてん」

水「其時代有名な役者は誰々でしたか」
里「わてら知つてるのんは右團治(先代)

橋三郎(先代)、傳五郎、霞仙(先代)、延三郎、芝雀、巖笑、我當、廓治郎、福助(先々代)、離球、玉七、荒五郎、珊瑚郎、多見之助、延三郎、卯三郎、吉三郎(先代)、成太郎、我童、政治郎(先代)等だす、それで思ひ出しましたか八ッの歳に辨天座で右團治のお岩、橋三郎の伊右衛門、多見之助の秋山で四ッ谷怪談を見ました時にあんまり、わかつたので一ト月ほど便所へ行くのをロソクをとぼしてもろてついで來てもろたことがおました」

夕「其時分曾我道家の十郎五郎は道頓堀

でもうやつておましたか」

里「やりかけだんなあ、其時分の一座は十郎、五郎、一満、蝶六、蝶七、蝶八、新左衛門、笑將、扇蝶だつしやるなあ、丁度太夫元の豊島はんの家がうちの横町でしたんでよう知つてました」
夕「それから新派の大頭は誰々でしたか」

里「朝日座が常小屋で、高田實、喜多村、秋月桂太郎、小織桂一郎、岩尾慶三郎だんなあ、なんし新派やおまへなんだ壯士芝居と言ふて居ました、戦争、時事物と言ふつまりチャンバラが多うおました、一寸進んで新聞物もやりました、わての見て覺へてるのんは「サーベル」雲中行軍でした」

か「そう、立判估でもしましたなあ」
里「そうだ、わてらでも門でよう子供同志芝居しましてん」

禿「其時分から二、三年前だつか、わたいの若い時分中座で廓治郎はんが新聞物で「不知歸」を畫之部に据へて確か川島武夫をやられた時樂隊の一員として小太鼓を叩いた事がおました、涙子

がハンカチーフを瞳に當てる時をキツ

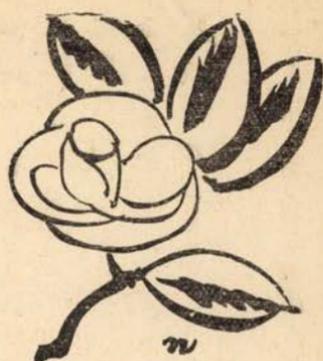
カケにして樂長がクラリネットを吹奏しますと太鼓と小太鼓でブルマを入れます、わたいはいいつもキツカケを見逃さんようにちつと舞臺を見つめて居た事を思ひ出しまんがな」

里「まあ、あんたは何んでもしなはつたんやなあ」

禿「へいやつぱり喰へていくためになあ」
一同笑聲、

水「新派のことで、一寸横道ですが、思ひ出したので言ひましょ、今でもたしか建物は残つてゐる、東區北濱五丁目の元住友信託會社があつた赤練瓦造りの洋館、其時分は連もハイカラなもので、帝國座と言つた其處で川上音次郎がおとぎ劇を初めてやりました、私の小さい時分がよく見に行きました」

里「それは二十五、六年前だんなあ、其帝國座が川上の最後の舞臺やつたんだつせ、川上の葬式が道頓堀を通りましたその光景は新派の連中が廊上下で棺を守つてゐました」(つゞく)



川柳塔

路郎選

山本丹路

勤めの身はげしき雨にむかいたり
ドン・キホーテの傾向がある朝をゆく
くちづけしより人形のごと人形のごと
嚴然とたつ病院を右に折れ
かたくなゝ存在にして翁とよぶ
有閑の瞳なか／＼あなどれず
私人としては好い酒の相手なり
働けば祈らずととも夜がくる

關本雅幽

何も識らない謙遜でとほして居
巡禮も野球観てゐる藤井寺
静物の一つ老僧歩めども

○

岩崎柳路

凌源選舉風景

選舉所眼でものを云ふ知つた顔
からかはれからかつて仲居それでよし

岡田某人

旗出して春期皇靈祭を留守
地主氣質又べからすの杭を打ち

灯も春のけはひなまめくにぎり鮮
春日遅々とバツトもう空
春酣に焼場へ續く砂ほこり
これまでといふ手をはたく探し物

祝_F君長男出生

薄團蹴る力もすでに男の子

心境

手を拍てばわが手も春の音がして

後藤青兒

商人を止めて正門からはいり
金縁へ不平の息をかけて拭き
故障車に乗る氣では來ぬ祇園下
極寒來、構へて居れば風もなし
金次第煙突にでも上ります
大阪の豫算を思ひダムを越す
西いわを

名人の名刺も出さず歸るなり

長男の意志に委した家を建て
お勝手の入口にあるゴルフ靴
松竹を志望する娘の髪長し
父親が長女に甘し月給日
マネキンへ丁寧すぎる尋ね様

喜多春秋

座ぶとんで掃いて坐つて汚ながら
いらぬ子に生れ末つ子親思ひ
前科者の遠慮を誰も氣がつかず
出前持奥はバクチだなと思ひ
分析をすれば嫉妬もまじつてゐる

吉田水車

吹雪する底の底なる地下工事
嘘ついてやるには惜しい腫です
薬やと言ふて野菜を喰べさゝれ
敷きなれたふとんも外す卒業期
嫂の趣味に座蒲團出來上り

姫田 夕鐘

金持ちを盾に皮肉な口をき、
神経を麻痺さしてくれる藝妓たち
現在を語ればとれることばかり
拾銭のさくら草にも春の影
中性に呼び止められた春の雨

平井 春光

純喫茶握手といふへた々笑ひ
これ切りの縁談が来る二十七

關市長と鷹治郎の死

市長さん一寸待つと成駒屋
三月十日日本天狗の夢醒めず

朝田 新水

一天の曇りなき日の朝戻り
朝飯廃止それが極道の聲となり
戀はまだつゞけて居たし薬取り
酒にがく又幸福を取り逃がし

明石 柳次

チンドン屋危く馬の鼻をそれ
床屋の鏡も雨が降つてゐる
麗かき蟻の動きの中にある
言譯の時計のネズを巻き切つて

尼 緑之助

みんな出るから見送りの數に居る
鉛筆で大きな希望書きよこし
手品など器用にこなし時の人
日曜日二人のしつこ言ひつかり

平井 與三郎

戀人の姉が出過ぎた話する
エプロンの後姿が惚れはじめ
例により一番先へ猪口を伏せ
地下鐵に乗つて見合に遅れて來

須崎 豆秋

銀行の窓へ大きなお辭儀をし

煙突の掃除屋淡路島が見え
老夫婦お經の文句行きつまり
張り板屋値切つて呉れと荷を下ろし

大鶴 喜由

つむる瞳は何をかくさん人妻だ
よく出来る子と遊んでる捨てゝおこ

福田 浮鬼

健康と共に闘志も消へたのか
疲れてる感じなんぼでも寝られ

三 鳴 美 笑

お妾と知つた人から戀をされ
なぐられてそれから女給戀を知り

首藤 竹 楓

おんぶした子供はねてる繪看板
左り前とにかく人をけなしたし

大西 八 步

不義理して露路の暗さを抜けるなり

母

煎薬のゆげまつわりし母の眉
縁談とやらにおくれて雛祭

柳兒君御尊父身まかる

ささらぎの氣短かさに逝きしといふ

宮 岡 白 峯

電車道子守元氣なハイモニカ

集印帳三笠の見へるところで押し

熊 谷 紅

淋しさは醫者にお禮を言はれたり

市 場 浚 食 子

苦勞とは思ひませんと縫ふ妻よ

實力の差が中傷の因をなし

水 谷 鮎 美

増築の脳病院の春の色

春の晝多辯な椅子をゆすられる

曾 我 部 宵 明

色街を二枚目と云ふ顔でゆく

順禮の鈴の音小驛眠つてる
新妻の手に靴墨を附けてゐる

尾添好郎

きみとあゆめば春雨おともなし

奥野禿山

牡蠣船の底親子心中流れ

濱職の家奥様のきつい顔

喧嘩したあとを淋しく兒は誘ひ

岡崎祥月

名産を自分の趣味で買つてゐる

押賣のまだ働ける腕を持ち

青木史呂

白足袋で商賣人でケチ臭く

職人は春の陽ざしをけなるがり

尖ンがつたこゝろは捨てん草の色

松下小柳子

寒月の橋の灯人を戀ふ如し

怠け者と見られし若さ晝の風呂

東谷開路

紺足袋が似合うて男勝りなり
讀みにくい手紙も親の有難さ
登記所で名のある人の立話

粒々集

東京富士野鞍馬

擔いでる間がいやなスキーヤー
軍艦旗皇威を見せて揺れてゐる

北海道にて(二句)

ツンガルを喰ひつめた妓が小樽に居

追分にいゝ節がある道産妓

泥棒が來さうに宿の襖を見

寝臺車まだ新聞の音がする

御影長崎柳秀

わるさせよ藥禮拂ふよりかまし

憎いまで思はせ振りの髪を結び

眼の動き男心を見透され

會の金當分借りることが出來

夜鳴きそば好きで撰んだ職でなし

明治以後の川柳年表

(柳誌柳書の部)

(その二)

西 島 ○ 丸

(書名、誌名)

(発行年月日)

(発行所その他)

魁連三題句集 第一號

(明治十七年甲申月)

會幹雨燕、和紙半枚二〇折十丁、隔月發行、狂句

柳風狂句集 全一冊

(明治十八年乙酉四月八日)

七世風也坊川柳互選

風 梳 集 乾坤二冊

(明治十九年丙戌二月)

元祖無名庵柄井川柳翁百年祭大會拔萃集

柳風交誼人名錄 全一冊

(同 三月)

淺草吉野町廣島久七父隠居第七世風也坊、廣島川柳六十二齡誌

柳 樽(繪本) 上下二冊

(同 三月)

石川縣金澤區横安江町近八郎右衛門版

大日本全國風雅の友風交の手引(全冊)

(同 七月)

東京神田花田町耕文社發行、前島和橋元祖川柳の圖を描く

川柳狂句柳たる初編 全一冊

(同 七月十五日)

東京神田今川小路額田正三郎編輯出版

雅友叢誌

(同 十二月)

大阪東區瓦町雅友叢誌社發行、毎月一回十五日發行

滑稽發句全一冊 (明治二十年丁亥七月) 東京、日本橋今古堂發行、中島儀市編輯

柳風狂句萬題集初編全一冊 (同 晚 秋) 第七世風也坊川柳序及選

於珍ら集第三編 (同 九月五日) 東京、芝新幸町頓神會發行、毎月發行、一部に狂句欄あり

花たら誌ひと枝 (明治廿一年戊子六月三十日) 東京、京橋中橋和泉町文友會發行、狂句、毎月一回、後いるは新誌となる

うさはら誌第一號 (同 八月八日) 東京、芝七軒町四、わからん會發行、月二回、狂句

愛京譽誌 (同 十月) 東京、京橋竹川町粹明社發行、毎月一回

滑稽發句屋奈幾樽(川柳猶鯨)全一冊 (明治廿二年己丑五月十七日) 時雨庵蛙水編、豆横本、專賣者大阪南區此村庄助

種ふくべ(一名狂句大全)全三冊 (同 五月二十日) 東京日本橋藥研堀小菅松五郎編輯發行

壽喜の美智第四號 (同 六月) 東京、本郷駒込西片町、壽喜之美智社發行、一部に狂句欄

新選柳樽(附狂歌集)全一冊 (同 六月五日) 藤谷虎三編、大阪心齋橋筋岡本仙助發賣

海内競争相撲句合全一冊 (同 七月) 勸進元蝶々子甘屋、八世川柳立評

樂雅記第一號 (同 七月廿五日) 東京淺草區北松山町樂雅記社發行、内田茂文編輯、斷然川柳と稱す

お釜 温故誌 第一號 (同 十月十五日) 東京、日本橋坂本町同樂會發行、親釜集の後身

新風狂句柳實生榮 全一冊 (同 十二月廿日) 東京、京橋區八官町豐玉社發行、豆本、高木山人著

明治新柳樽 全三冊 (同 月日不明) 名古屋市若山文二郎發行、繪本柳樽の一種、日榮万之助著

しののめ 第一 (明治廿三年庚寅 一月十九日) 東京、下谷區西町三、しのめ社發行、毎月一回、狂句欄あり

柳風力くらべ 第一號 (同 六月十七日) 東京、小石川表町荳木秋屋編輯、八世川柳序

撥 あたり 第一號 (同 九月十五日) 東京、日本橋區坂本町活東社發行、親釜集の後身、毎月二回、狂句欄

現今大家略傳川柳狂句集 全一冊 (同 九月廿九日) 東京、神田關常次郎印刷、荳木秋屋編輯

吾 孀 布 里 第一 (同十一月十五日) 東京、神田連雀町紫紅會發行、菊判、川柳云々の文字多し

雅の力薨みやびのちからくらべ 第二號 (明治廿四年辛卯 一月二十日) 東京、京橋八丁堀萬文堂發行、四六判七〇頁

開化阿呆陀羅經附古今川柳全 一冊 (同 三月五日) 東京、京橋五郎兵衛町井ノ口松之助發行

繪本川柳五百題 全三冊 (同 六月) 東京、京橋三松堂松邑孫吉發行、出鱈目に合冊した複製もの

古今狂歌狂句集 (東洋文藝全書第十五編) (同 七月廿五日) 東京、日本橋博文館發行、岸上質軒編

おもしろ誌 第一號 (同 八月一日) 東京、神田區田代町九、兄弟舎發行、月二回發行、内田茂文編輯主任

柳風肖像狂句百家仙 全一冊 (同 八月十四日) 東京、下谷谷中清水町一兒玉環印刷兼發行、任風舎川柳編輯

滑稽狂句新選柳樽(一名明治智惠鏡) (同 八月廿九日) 兵庫縣姫路市古川活版所發行、北後吉次郎編輯

可愛良誌 第一號 (同 八月) 横濱市相生町可愛良誌會發行、菊判、狂句欄

別天地 全一冊 (同 九月十日) 東京、京橋中橋和泉町集文館發行、四六判

みやび雄 第一號 (同 九月) 東京、京橋八丁堀万文堂發行、四六判、狂句欄を置く

古今川柳一萬集(東洋文藝全書第十七編) (同 冬?) 東京、日本橋博文館發行、骨皮道人編

故絲亭主人五世川柳翁略傳 全一冊 (明治廿五年壬辰) 二世絲亭前島和橋著

畫本柳樽(畫柳二編の複製) 全一冊 (同 四月五日) 大阪鈴木常松發行 積善館出版

古今狂句一萬集 全一冊 (同 六月十三日) 花月庵雅柳選、大阪鍾美堂發行、横綴本、明治三十年に序を附げ再版

花の雫 第一號 (同 十月六日) 東京、京橋區銀座二丁目芳文堂發行、四六判、毎月二回

川柳作法指南 全一冊 (同十二月十三日) 文學叢書第四編、柳坡粹人著、東京神田頰才新誌社發行

ねむけさま誌 第一號 (同十二月十五日) 大阪市北區此花町れむけさま誌發行所發行、毎月二回、狂句欄

時事狂句蛙の聲 全一冊 (明治廿六年癸巳) 東京、神田團々社發行、自他樂房作併畫、四六判廿一葉

上野

せられました。

▽富士野鞍馬氏は二月二十日北溱道に行かれ函館よりお便りを頂きました御彼岸の湯に駒ヶ嶽光つてゐる (鞍馬)

▽山川花戀坊君は「昭和川柳類題高點句集」を刊行されました、四六判横綴約三百頁

定價一圓、發行所 東京市芝區濱松町四ノ十一山川信男尙 月七日その出版を嬉ぶ含を芝太神宮の社務所で催されます。

▽帆傘川柳社の三月例会の振替口座徳島四七八一番加入記念を兼ねた席上より寄書を頂きました(六日)

▽池田可齊君は滿洲旅行をされ新京より三月三日お便りを頂きました。

▽あをぞら吟社の第一回句會は二月二十四日ベニヤに於て催され席上より寄書を頂きました。

▽伊藤瑤天君は東京城南朝日新聞の柳壇を擔當され旺んに活躍をされてゐます。

▽へちま奥町支部句會は三月二日に催され席上より寄書を頂きました。

ました。

▽川合舟々君は三月三日白濱温泉に入湯されお便りを頂きました。

▽酒井大樓君は西大寺參拜の歸途今治の川柳庵に訪問され本社今治支部の諸氏と共に寄書を頂きました。

▽村田新市街君の母堂が二月十六日逝去されました謹んで哀悼の意を表します。

▽加藤文醉君は二月二十日島田娘々奴君と共に別府に向ふ途次みどり丸船中より便りを頂きました。

▽松盛琴人君は大阪市東區平野町二ノ十一で今度轉寫専門印刷業を始められました。

▽野村稻實君は東上の歸途三月二十日日本社事務所を訪問されました。

▽大阪朝報では大阪川柳家の職業と川柳に關する隨筆を連載、更に三月下旬より大阪柳人列傳を訂柳編で連載してゐます。

轉居

○石川寛水君(大阪市港區三條通り三丁目三四 野中松太郎方)

○直木倫太郎氏(滿洲國新京城後路一〇二)

○志水七敏君(名古屋市中區小林町十九)

○後藤青兒君(大阪市東成區南生野町二丁目六〇)

○大高角嵐君(大阪市南區高津三番町一六 渡邊文雄方)

○塚越正光君(大阪市生野田縣町一五一)

○平井典三郎君(大阪市住吉區濱口町東一丁目一三)

○竹内機見女君(大阪市天王寺區寺田町三)

○宮岡白峯君(大阪府南河内郡柏原町本郷八)

○河野夜玉君(大阪市旭區鳴野町三〇〇ノ四ノ一三)

改號

○河石山海子君は(石川寛水)

○小島絃靖君は(祥志)

▽鳥山一步氏は合成化學工業所の相談役の處今般取締役に就任

▽大谷五花村氏は二月二十七日鬼怒川温泉に遊ばれお便りを頂きました。

▽同氏は三月十日に上京三太郎氏宅を訪問更に母堂と共に伊豆大島に遊ばれ三原山の登山をなされました。

▽本社大鏡支部柳社九天、天八、秀太、青吾、久米雄、ひかるの諸君は三月二十一日ハイキングを兼ねて保津川ライン下りをされました。

▽本社篠川第二支部高松吟社の三月例会席上より寄書を頂きました(一日)

▽本社伯耆支部の三月例会は三月十七日に催され席上より寄書を頂きました。

▽本社伯耆支部の三月例会は三月十七日に催され席上より寄書を頂きました。

▽大谷五花村氏は二月二十七日鬼怒川温泉に遊ばれお便りを頂きました。

▽同氏は三月十日に上京三太郎氏宅を訪問更に母堂と共に伊豆大島に遊ばれ三原山の登山をなされました。

▽鳥山一步氏は合成化學工業所の相談役の處今般取締役に就任

▽大谷五花村氏は二月二十七日鬼怒川温泉に遊ばれお便りを頂きました。

▽同氏は三月十日に上京三太郎氏宅を訪問更に母堂と共に伊豆大島に遊ばれ三原山の登山をなされました。

▽鳥山一步氏は合成化學工業所の相談役の處今般取締役に就任

▽大谷五花村氏は二月二十七日鬼怒川温泉に遊ばれお便りを頂きました。

▽同氏は三月十日に上京三太郎氏宅を訪問更に母堂と共に伊豆大島に遊ばれ三原山の登山をなされました。



本社三月例会

三月六日夜 於本社事務所

初春の香を感じるべく、かなり風の強い夜であつたが、それでも熱心な作家がつかめられて會場は全くの盛況であつた。山雨樓氏の「川柳の形式に就いて」の講演は新進中堅作家に呼びかける、句會の作句態度及雑吟に於ける更に自由律と破調の句に對する、正しき認識より川柳の十七音字なる形式に對して正しき考察等に就いての甚だ有意義なるお話であつた。

各題選者披露の後、路郎主幹から愉快なる漫談があり和氣藹々裡に閉會した。(九波記)

出席者 路郎主幹、汀柳、正光、山雨樓、ライト、つとむ、鶴峯、禿山、鉛位、宗雄

美次、紳樂、琴泉、牧人、苦捨、柳笑、史呂、天國、半覺、綠雨、自由郎、哲夫、榮一、隆一、修、清彦、與三郎、三碧、まさじ、里十九、鮎美、夢裡、正明、白柳子、かほる、春光、閑路、丹路、章象、水郎、豆萩、乱萩、滿潮、凡水、九波

席題 腕白 互選、里十九披露

腕白な時代逸話の中に生き 苦捨
腕白の癖で濟んだと云ひ聞かせ 山雨樓
腕白が母の膝で甘えて居 綠雨
腕白へ猫は不安な息を吐き 天國
腕白の癖をこきえて歸つて來 史呂
腕白を詫びて日暮れを連れ歸り 與三郎

腕白の今日泣かされる相手が來 紳樂
腕白を父親そつと知らぬ顔 修次
阪妻の刀の錆になつてやり 清彦
妹をいじめて雨の日が續き 三碧
腕白へからかふように赤とんぼ 鮎美
腕白を夫に告げる夜の膳 牧人
腕白の話も蓋きて新世帯 自由郎
腕白は何時でも賊の方になり 哲夫
腕白に近所の犬は逃げ廻り 禿山
腕白の顔あり〜と指摘され 同
腕白が見合に邪覓な傷をつけ 凡水
腕白は加勢に犬を連れてくる 同
腕白の枝見上げてる癒えた傷 鉛位
腕白の頃懐しい寫真帳 同
腕白の一面やさしいところあり 里十九
腕白ざかりへ陽が短かすぎ 同
腕白が靜かに居れば案じられ 同
左官屋の傍で腕白おとなしく 同
腕白を呼んで聞いている探し物 同
鳴るものを鳴らし腕白氣嫌よし 同
腕白が止むとそろ〜不良性 正光
患はぬことを腕白褒められる 同

席題 花形 正 光選

花形は花環の中に狭ふ居る 牧人
 長家中の花形家賃ためてゐる 自由郎
 花形が来て町内に旗が立ち 天國
 花形のかすれた聲が惜まれる 艸樂
 花形の疲れそのまゝ旅に立ち 間路
 花形は妻に泣かれる日が續き 艸樂
 長二郎トツカヒンなど送られて 里十九
 花形（花形）寝臺車内のインタービュー 亂耽
 花形として贅澤も許される 史呂
 花形の通る道頓堀せまし 章象
 財界の花形といふバツカード 三碧
 悪役にしても花形賞められる 里十九
 花形に頼りものゝ母が居る 春先
 花形の素顔現しき小料理屋 亂耽
 (軸)スターシステムへ下積み憤り 正光

席題 空想 鮎 美選

空想の窓に冷たく光る雨 鉛位
 空想 葉書一枚投げこまれ 山雨樓
 空想へ何かこげてる匂ひなり 三碧
 空想に父は黙つて笑ふのみ 鶴峯
 空想の通りにタイア動くなり 白柳子

空想を追つてるベツト陽が當り 正光

空想と獨身主義を未だ捨てず 春光
 空想にあんまり空は高すぎる 綠雨
 空想が好きストロゲの火を凝視 丹路
 なぐられたとて空想の消えやも 亂耽
 空想は無限ふくれる紙袋 同
 (人)空想の獨り火鉢をくすばらせ 天國
 (地)空想に自慰あり弱く生きてゐる 苦捨
 (天)空想の蒼くくすき白湯を呑む 亂耽
 (軸)空想の雲がくすき白湯を呑む 鮎美

席題 隣 綠 雨選

隣まで走る用事は女なり 間路
 隣では十人家内の話聲 山雨樓
 お隣へ花嫁が来る騒しさ 章象
 隣から猫の苦情を持ちこまれ 清彦
 お隣も酒の粕焼く匂ひ 里十九
 お隣の佛立講に起されて 豆秋
 お隣のお口上手に乗せられて 里十九
 お隣と勤めが違ふ朝の飯 正光
 地下工事隣へ詫がるこゝが出来 春光
 旅行して隣の子供ふと思ひ 白柳子

雪の朝隣を遠く見てゐるなり 鮎美

(人)やりとりの菜に隣の味を知り 秃山
 (地)隣から碁盤を抱えて挑まれる 半疊
 (天)錢替えに行くお隣の忙しさ 白柳子

兼題 醉醒 路 郎選

醉醒でも酒中花握つて居 半疊
 醉醒へ子を突付けて意見され 哲夫
 醉醒の白粉の香に慌てたり 秃山
 鍵裂へ思當つたことばかり 清彦
 醉醒が子に修身の字を問はれ 自由郎
 醉醒へ見たことのない掛蒲團 豆秋
 醉醒の無理な握手と思へども 亂耽
 醉醒で安原橋を書き續け 滿潮
 醉醒で千日前の横へ出る 同
 淋しさは十錢の醉醒めてくる 同
 君此處に未だ居たか（とほよ）も酔ひ 艸樂
 醉醒のお冷貰ひに裾を曳き 同
 (人)醉醒をお冷と付がまつてゐる 自由郎
 (地)醉醒は何廻も御辭儀してかゝ 里十九
 (天)醉醒の水も教へて世をゆすり 與三郎
 (軸)醉醒の又忠孝を説く身なり 路郎



藝妓

増位 汀柳選

藝妓もうクランカルにされて、
根ぐりが無暗に痒い稽古三味
本當の母に會ひたい藝妓なり
妻も娘も俺も藝妓へふりかへり
藤八に勝てず三味線グツト寄せ
父さんが解らぬまゝに妓に賣
觀光のプラン藝妓のこともあり
奥様の最貞も受けて名妓なり
故郷は遠し藝妓の眞晝かな
耳元へ藝妓何やら告げに来る
姉藝者自分の事の様に自烈
自前にはなつたが老妓の數
左棲 湯町の宵の柳影 正 柳
はやりツ妓小菊紙にる色日記
ほんとうの親にも邂逅す姐藝者
花名刺俺だけ呉れた妓の腫 木履

い の 助
葉 魚
はるを
ライト
島 人
朱金抄
飛 春
朝 雨
天 國
蛙 庵
輝 親
不 美 男
一 峯
沐 天
木 履

流行妓義理と云ふ字へ思ひきり
藝達者だけでは女將納まらず
うたゝ寝の藝妓へ春の風にほひ
揚げ髪を何故かなじゝ藝妓の子
弟と逢ふに藝妓といふ人目
妓ふと心のうさの紅をつけ
素通りの藝妓女將に皮肉られ
借金の変さを藝妓に向けて見る
藝者屋の晝あほらしい顔ばかり
初恋は秘めて藝妓は惚氣いふ
初心なのへ面白想に藝妓寄り
橋を行く藝妓の夢と川の色
老妓ふと故郷の色をなつかしみ
故郷へ遠く藝妓の撃ちて生き
この土地に馴れぬ藝妓のま
春雨に藝妓と二人ゆくこゝろ

美津女
牧 人
凡 愚
車前草
水 客
久米雄
世間音
不二號
草 樓
葉 光
非常兒
津戸夢
三 鶴
嵩喜固嵩
長 樂
永 樂

川柳家戸籍調(續)

(係) 縁 雨

- (1) 姓名(2) 雅號及別號(3) 生年月日
- (4) 出生地(5) 現住所(6) 職業又は勤務先(7) 好きな句(8) 自信の句(9) 川柳以外の趣味(10) 配偶者子供の有無(11) 嫌ひなもの(12) 川柳に手を染めた年月

(本名) 岡 本 嘘 夢

- (1) 岡本秀雄(2) 嘘夢、紫水(3) 明治廿六年三月十日(4) 土佐之國高知(5) 東京市杉並區圓寺三ノ一六二(6) 東京市役所(7) 黎明の大氣の中に開く花 劍花坊
- 「一人去り二人去り佛と二人」 信子(8) 「つながれた鎖のたけを這いまはり」 「一點に闇を集めて灯の王座」(9) 書道(10) 妻、子供、男二女一(11) 蛇(12) 昭和二年一月

(118) 篁 牛 人

- (1) 篁光磨(2) 牛人、マナツサの人殺
- (3) 明治三十四年十月十日(4) 富市石坂一八五〇(5) 富山市山王町三八(6) 圖案家(勤務先ハツ程)(7) 幾層のうちに幾人

姉藝者しづい、顔した撥搦き、秀路
 流行妓秘密なことはありはあり、緑水
 裸でも踊る、元氣の老妓なり、柳夢
 戎橋、藝妓視線をあびて行く、あや美
 ユーモアを解して藝妓若いなり、紫陽
 淋しそうな藝妓の年を聞と見る、同
 お得意を舞ふには狭い座敷にて、錦城子
 てれくさく坐るは、ダンスの妓、同
 非常時に藝妓も旗を持たされる、たけを
 戎橋、藝妓、藝妓を見返つて、同
 老妓ふと吾子の歳を思つてみ、小樓
 名妓てふ名があり意地がある、同
 二次會はみんな馴染を侍らせる、楚堂
 いれずみを直ぐ見せる、妓も来て居、同
 藝妓の子宵から添寝して見たい、玉芳
 あのはしやぎ、苦の有る姉藝者、同
 ぬかるみへさわり、お妓の裳裾、宵明
 雪洞へ美妓、百年も前の顔、同
 まだ少し色香の残る撥の牙へ、吉凶庵
 俵屋はこゝ、一軒の藝者街、同
 藝の無いやつが藝妓とよく話し、青兒
 藝妓にも戀があります、臘月、同
 藝妓今日奥さんに會ふ肚をきめ、曉童

仕事してゐるのを藝妓みて通り、同
 三面を藝妓、人事ならず讀み、櫻崖
 錢湯でそれ者揚りと見破られ、同
 雲模様氣にして遠出の髷が結え、愚生徒
 末つ席の酒豪を老妓見逃さず、同
 三味線をひかぬ藝妓の美しさ、三碧
 藝妓ふと里子を想ひ出した顔、同
 かな言の英語も云へる、港の妓、青柿
 好きな客今宵姐はん酔ふ氣なり、同
 茶柱に藝妓は機嫌直したり、文庫
 將軍と藝妓、眞屋に並び、同
 色戀を忘れた顔で老妓くる、臯山
 あいさつの妓が歸らないと座敷、同
 藝者ガールなど、外人懂れて、苦捻
 残り香の老妓寂しい紅をさし、同
 姉一人、藝妓に出てる講義録、呂香
 氣味悪う、或る日、藝妓におられる、同
 婆藝者さて食べること、素路
 藝妓ふと落籍されてみる氣にも、同
 くだらない唄と藝妓は思へども、同
 子を抱いた藝妓と晝の風呂會ひ、いわを
 お座敷が閑な藝妓の勝負好き、同
 寶惠範の藝妓へ話ししてみまし、同

意義を持ち(牛人)(8)此の斷言を許さぬ
 腦漿(牛人)(9)柔道二段、五月初段(但
 し自稱)(10)配偶一、子供二、(11)なし
 (12)五年前位

(419) 中川 星水

(1)中川清水(2)星水(3)明治三十四年
 三月二十日(4)高知縣安藝郡川柳村(5)
 同じ柳號川柳村(6)菓子雜貨商(7)ねエ
 愛して頂だいにあきれさせ(路郎)人生の
 裏をちら／＼五十過ぎ(濁水)(8)見つか
 りません(9)釣(10)有女一人(11)藝者
 (12)高知柳壇(濁水選)へ毎日投吟三年と
 一月二十六日になります(二月二十一日)

(420) 福永 泰典

(1)福永泰典(2)源十吉、明惠造(3)明
 治三十九年八月二十一日(4)京都市(5)
 京都市堀川通寺之内上ル三丁目上天神町
 (6)木綿問屋勤務(7)「君ケ代を聽いて
 るやうな菊の花」小太郎、「賣られたは
 三味線に手の届くころ」水府(8)「かく
 れんば母は見つかるとこにゐる」皆んな
 夢だつた東京驛を發ち(9)聯珠。映畫
 輕い讀書(10)昭和十年二月四日結婚(12)
 昭和五年七月

(421) 岸 輕舟

終列車 衰れ 藝妓に 成る 同志 紅
 藝妓 今日消したい 腕の 頭文字 同
 過去の 夢 眉毛の 薄い 二度の 棲 同
 あり だけの 孝をつくして 藝者 世
 片田舎 藝者 落ち目の 夜を 稼ぎ 同
 戀ゆへに 弾く 三味で 藝妓の 腫 同
 金と 戀なやむ 藝妓の コツブ酒 正 祐
 心では 泣いて 藝妓の 三下り 同
 お百度の中に 桔梗の ばちぶくさ 同
 好きな 妓の 大阪辯を 真似て 云ひ 雛千代
 颯爽と 不見 轉 藝妓 御光來 同
 賣ツ 妓で それで 手管はないのき 同

草

若草に 足投げだして 父、子、母 碧 選
 草に 寝て お天道様を まぶしがり 久米 泉
 巡禮 のどつと 疲れた 草の色 宵 明
 摘み 草の 娘に 散つて 行く 白い 雲 天 國
 草に 居て 夕陽 他國のもの となり (佳) 天 國
 すみれ 草 高い 踵で 踏まれて 居 美津 女
 はてしなき 希望を 草に 寝こんで 新市 街
 草い きれ 元 將軍の 頬 冠り 紅

姐さんものろけて やはり 若いき 同
 揆の 疵 それから 長い 物語 同
 この 頃の 噂に 馴れた 流行 妓 新 水
 月給の 順を 藝者に 見破られ 同
 末席へ 酌が 届かぬ 流行 妓 同
 三味線を 渡と 藝者の コンバクト 同
 名妓に ま本名に かへる 家を持ち 同
 わびしくも 老妓に つまる 夜の 雨 新市 街
 信心は 藝妓の 胸に きく 日あり 同
 藝妓 すらりと くずれて 無心する 同
 姉 藝妓 今日 塗下 駄に 思ひ あり 同
 藝妓 冷たく 見たる 札の たばかな 同

東山 本 谷 開丹 路路 共選

ビクニツク 草の 葉つばが 笛にき (佳) 阜山
 將來を 語る 草原 暖かし たけを
 全快の 朝よ 萌え 出る 草の 芽よ 朱金 抄
 草は 草の 息 吹きを 陽に 吐けり 有爲 郎
 どこに でも ある この 草の 名は 知れ 三 碧
 若人 に 草の 褥の ある 五月 朝 雨
 青春へ 草 無意識に ちぎられる ライト
 藥草の 匂ひ 土瓶 から あふれ 同
 雲が 動く 草が 動く 春の 息 泉 人

(1) 岸川 敬太郎 (2) 輕舟 別號 ハアリマ
 セン (3) 明治三十年四月十九日 (4) 廣島
 縣 豊田郡 幸崎町 (5) 小樽市 色内町 二丁目
 八 (6) 北海道 廳 漁業 取締船 (7) 毎月 の 柳
 誌に 十句や 二十句は ありますが 先日 故人
 になられた 夜半 杖さんの 句、「本性を見
 ぬかれた 金は した金」等 忘れられぬ 句で
 す (8) 句に 自信は とても 持てませんが、
 間違つて 天に ても 抜いて いたゞくと 好い
 のかなと思つて います、その 意味の 句で
 は「早發 時計 通りの 夜が 明ける」(9) 三
 年前 カラ 北千島ノ 植物 (10) 産メ ナイ 妻ア
 リ (11) 時化ト 蛇 (12) 昭和二年十月
 (13) 前田 義風子
 (1) 前田 義久 (2) 號の 多い 方だが 現在 お
 もに 義風子 (3) 明治 之人 間 四十五年 一月
 十三日 (4) 加越 紀三州 の 分源 點 三國山、
 (5) 石川 縣 河北 郡 英田 村 宇 興津 (6) 職業
 は 凶作 と 闘つて ゐる 百姓 勤務 先は 而して
 田、畑 (7) 元旦 だせめて 眼鏡を ふきませ
 う 其他 割合 川柳 雜誌の 作家が 好きです。
 (8) 騒いでる 國あり 世界 地圖を 出す、こ
 れから 飛躍の 希望に 燃えて います (9) 別
 に ぬきんで ても もの ないが 十年の 郡文 藝
 大會に 優勝した のは 事實 作物と 大分す 一
 切の 事 (10) 前途 遠遠 せん 話も ない (11)
 裏切者 拜金主義の 極端 (12) さてと 指を 折
 つて みた ら 五年 前つ まり 昭和 五年 初春が
 スタート らしい。

○箸洗ふ音は但馬の女中なり 山海子

但馬の女中と云つて、田舎出を表現したものであらうが、古句で相模下女と云ふやうに或るものを代表した言葉としては通じない。しかしこの場合「なり」止めはいゝ。「箸洗ふ音昨日来た女中なり」としたい。

○浮腰で牛鍋つゝ箸の短かき 蛙庵

浮腰は面白いのだが、下五で調子をこわしてゐる。箸の短かいと云ふことより「浮腰で牛鍋へ箸忙しそう」と見た方が情景がよく出て来る。

○井を持つて割箸口で割り 丹洲

「口で割る」ところを捉へたのはよい着想。しかし原句では只事實の説明に了つてゐる、もう少し句を練つて、言葉を躍らせなければいけない。「空腹へ井箸は口で割り」

○食を得し感謝の箸を戴いて 芳泉

ありがたいことには、今日も亦かうして食事が出来るといふ、つましやかな感謝の念が箸を戴かせるのであらう。が「食を得し」は

「職を得し」とした方が深味が出て来る。更に「職を得し感謝の箸は戴かれ」とすれば箸そのものが、より立體的に浮び上つて来る。

○箸の數子の數する場所でもめ 卓山

子澤山を現はしてゐる句、がやんゝと雄然たる夕食時の風景が浮ぶけれども、寧ろ「箸の數子の數する場所があり」と見た方が本當でもあり、又妙味があると思ふ。

○姑のこことへ箸に目を俯せる 春帆

この句は「姑のこことに箸へ眼を俯せる」とすべきである。「へ」は方角的な音なり感じなりがあり、「に」には原因的な響きがある。原句の「箸に」の「に」は勿論方角的なものではあるが、あまりはつきりした目的格風な感じが先に立つて、この場合何も眼を俯せる先が必ずしも箸でなくともいゝ様になつて来るから、多少ぼやけさせた「へ」の方がいい。

○置くこことに置いてお箸のよばれてる

歌部路

およばれのやまらしい儀禮では箸もちやんと置く位置があらうし、かしまつたお客の有様が見なれる様であるが「お箸のよばれてる」に難があつて、意味を曖昧にしてゐる。「置くこことに置いてよばれてゐるお箸」

○箸箱へこんなにちびた箸を見る 紫陽

まゝこの句よりも、この句の方に着眼の面白さがあつていゝ。だゞ原句のまゝでは少し物足りない所がある。「こんなちびた箸を」見ただけでは不満である、もつとその箸の背後にあるものを見つめ見きはめる必要があらう。「箸箱に箸ちび切つて平和なり」

○先妻の子と云ふ箸を上げ下し 彌生

つまり繼母子のあひだのことを詠んだのであらうが、見方が浮つてゐるために生きてゐない様である。原句のまゝでは箸の上げ下しにさへやかましく云はれるといふことを云つてゐるので、箸といふものがほんの一種のたとへにしか使はれてゐない。要は「上げ下し」といふあり來りの言葉で飾つた、ために

失敗してゐるのであらう。それよりもやつぱり現実的な状況をつかまなくてはいけない「繼母と向き合ふ箸をそつと取り」

○喰べ初めに持たず箸さへたのしまれ

美代坊

喰べ初めの子供を持った、恐らく若い父母のほゝ笑ましい心理を持つて来たのであるが「たのしまれ」の下五が何といつても粗雑である。それよりもつと具體的な氣持なり動きなりで、そのたのしむ様を出す様につとめるべきであらう。「喰べ初め持たした箸が大きい」

○食べ初め大人の箸を持ちたがり 美津女
ちんと座らせてもすぐこそんゝやり出す食べ初めの兒が、大人の箸を持ちたがるといふこともあるにはあらうけれど、少し誇張が目立つ様である。下五を「取りに来る」と代へてみてはごうであらう。

○父の箸子の箸母の箸は後

節子

まづ父の箸を出し、それから子供の箸を出すとして一番あとから母なる人の箸が、膳の端に乗る。一家揃つた食時ごきの母として妻としての心使ひが箸の順序にまで現はれる。それが、叙法が「母の箸は後」と説明調になつて

ゐるために全體が死んでしまつてゐる。又著々と三つ重ねてゐるのは効果をねらつたのかも知れないが、この場合は一つ略して「父の箸子の箸母のは後から出」としたら多少生きて来る。

○ひだり箸矯める母性の夕餼ごき 不二號
箸を左で持つ癖、それを矯正してやらうとする母親、即ち母性愛の一つを詠まうとしたのであるが「母性の夕餼ごき」ではあまりに抽象的になつて、も一つはつきり景が現はれない。「ひだり箸矯めるに母の汁が冷え」夕餼時と限定する必要はない。

○塗りはげた箸で食へてる恙なき 双亭
使ひふるした箸で食へる毎日の飯、觀すればそれは全くありがたいものであり塗りはげてしまふまでかうして、生きのび承らへてゐることに對する感謝ともならう。想は心境的なよきを持つてゐるのだが、表現がやゝ物足りない。「食べてる」の「る」と下五の「恙なき」に弱味があつて凡化してゐる。原句に即して訂正してみると「塗りはげた箸で食べて、恙なし」

添削を要せぬ句。

あかぎれの手につり合ふ妻の箸 柳 夢
胃を病んで箸の重たい日々續き 青 柿

決心がついてお箸が動きだし 白英
象牙の箸曰く羊とは佻しいぞ 愚堂
刺箸が無味乾燥な音に裂け 呂烈
箸紙の中一枚は不孝者 世間音
菜箸は神經質な長さなり 葉光
妻の骨二本の箸でものたらす 章泉
琵琶胡もうま近く壽しの箸を出し 甘雨

ふるさとにて

赤い竹箸クラシツクの匂ひする 笙人
右の内て世間音君と章泉君の句を佳吟に推す。

○

前回「箸」といふ課題を選んだとき、この題は恐ろしく川柳的だと思つた。日本人として通常毎日手に取らないことはない箸の課題からは、生活を詠つたよき川柳が相當集まることゝ期待してゐた。ところが集つた結果は期待を裏切つて、生活の味が出た句は比較的少かつた。これは本欄が必ずしもよき創作を得んが爲の紙面ではないのだから、別に悲觀することはないが、考へさゝれるものがあると思ふ。即ち作句と生活の問題である。課題吟の場合でも努めて自分の生活なり、心境或は経験から句材を求め、それを通じて眞實を歌ふことが大切である。このことを技巧的修練と併せて、常に忘れてはならぬと思ふ。

(同)地すべりの跡へ雑草だけ延び
 (人)金策がつかず大地は凍て、
 (地)幸福な大地でありし海果
 (天)凱旋へ大地御國の音がする
 (軸)大地踏みしめて月給取り出る
 席題 拳骨 禿
 拳骨を振るつた話母に知れ
 拳骨が獅子に當る物凄さ
 拳骨は妻のけわしい顔でやめ
 小走り来た拳骨の早いこと
 拳骨を見たけ一つトンホ切り
 (佳)とうちの拳骨だけが恐いな
 (同)壇上の拳骨清き粟を乞ひ
 (同)拳骨を二つちしやな子が生れ
 (軸)拳骨の相手が悪い餓へた犬
 席題 氷柱 天秋・木履共選
 覺悟した情死つら、を斜に見
 氷柱みて忍耐力を考へる
 水道のつら、と知つた朝戻り
 長男は氷柱の家で死ぬつもり
 (軸)橋桁のつら、に母の寒い顔
 水道の氷柱へ牛の荒い息
 渡り鳥氷柱の上にとまるなり
 水道のつら、に亭主起こされる
 水道のつら、に下女はむごく折り
 スキーに行つて
 (軸)快哉の一つに氷柱の大きさ
 席題 ひげ目 杏林・楚堂共選
 女房の方が學歷高いなり
 ハイヒール袴な島田へ肩を張り
 制服のひげ目車内で立つてゐる
 笙人

喜山 山雨樓 鮎美 久米雄 某人 某人 楚堂 山雨樓 天風 鮎美 阿久津 楚堂 天八 某人 禿山
 (佳)盛装が見渡して、路次へ折れ
 (同)これつぼ思ふ香奠端へ置き
 失業と云へず同窓會の膳
 病床に見る妹の初化粧
 びる齋戀に見る目を感じたり
 ひげ目を見せまいと戀に貧乏
 失戀のそれからひげ目ばかりなり
 ひげ目で居れば座蒲團盛りあがり
 山本喜山氏二女追悼
 席題 片言 喜
 晚餐へ子の片言が聞えそう
 ほめられた子の片言がよくつゞき
 片言の未だ新しい娘の寫眞
 線香の煙片言おもひ出し
 未の子の片言兄がなほしに來
 片言を母親先に聞き分ける
 片言の先を母親云ふてやり
 まだ歩けなくてホッ、物が云へ
 片言の電車のねじをかけた、れ
 片言のくせをそのまゝ客に出し
 片言も先立つた子は例好めき
 耳底にまだ残つてる片言着き
 片言で名前が付いて犬居着き
 片言が何かうれしい父となり
 片言の片手へぬくい錢を持ち
 (人)八燭光片言もなく明いなり
 (地)まぼろしとなる片言に變する
 (軸)片言で子供は妻の肩を持ち
 (軸)片言でお膳の上をかきまわし
 課題 端
 秀太 某人 喜山 楚堂 山雨樓 天八 山雨樓 鮎美
 一列にならんだ端が指名され
 云ひ足らぬ言葉の端を壓へられ
 端ッパへ寒風の滲む舞臺裏
 ハンカチの端をいぢつて口説かち
 (人)プラットの端で朝鮮語をばつみ
 (地)ハン先の香具師は子と思ひ
 (天)片端につつげりのいる将棋盤
 川柳雜詠如 月例會
 松江支部 於ミドリ喫茶園 京 月報
 兼題 鬼門 京 祥月
 鬼門とは知らず家門の口に乗り
 鬼門除の上に燕が巢をつくり
 若死がっつき傾所を建てかへる
 飲むやうになつて鬼門が續くなり
 零落の門に寂しい鬼門除
 鬼門等言つて居られぬ裏長屋
 鬼門とは知つては居れど金がなし
 不恰好な家鬼門を外れてゐ
 頭梁と鬼門の事で話し込み
 兼題 穂 莞 路選
 縁側の穂を巧に手毬唄
 縁側で穂つく音が春を招ぶ
 穂を持つ子にいちらしい薬瓶
 穂が百つて逢はれる宵となる
 拗れた子に穂はひしやげて朝と
 穂を受取つて着物の裾をよせ
 (佳)泣いた娘は穂と二人人歸り來
 (同)初めの母となつたる手毬唄
 席題 金 穂 山川 兒選
 金穂が叩いた指をなめてみる
 天痴人

書飯へふと金槌を置き忘れ
姐さん(は)金槌危くつかつてゐ
金槌もちびて鍛冶屋は歳を取り
金槌の最後は板の音になり
可明 卷二 京葉 荒路

席題 國境 春 朗選
(佳)國境と分らずに雲の氣まゝ
(同)國境も唯同じ山月山河
(同)國境もなく山火事は燃え行き
(同)國境は鐵條網の赤くさび
京葉 可明

席題 流線型 天痴人選
勝 詩つゞも流線型が使はれる
可明 卷二 京葉 荒路

席題 邪 寛 祥 月選
頭刺者なか／＼去らぬなり
體操の聲が考査邪寛になり
猥談へ女は邪寛なものにされ
男から云へばバラソル邪寛になり
接吻へ鼻髯ちよつと邪寛になり
(佳)連て来た妹が邪寛運れが出来
(同)人皆邪寛と想へり初戀の
柳人 明選

席題 拳 闘 可 京葉 荒路
グロッキー對手の面が三つ見え
ボクサーのサインと思へやきし字
拳闘のふと藤八の型になり
拳闘に快感がある銀狐
息の根を止めて拳闘勝となり
卷二 京葉 荒路

席題 仲 居 卷 二 選
仲居ふと座敷へはすす事が出来
仲居もう客の財布の中を知り
仲居から妓の氣持聞かされる
春朗 天痴人

男らしくなきいと仲居背を叩く
天痴人

帽子とる戦術がある仲居ある
泥酔の客を仲居は煙たがり
川柳雜誌社 大地吟社例會
三月一日 於綠之助居

策題 三 月 章泉
女王の如く甘へる難祭の子
三月の陽だまりで物貰ひの欠伸
三月の土の香がつとしみぬ
三月の土の凹みへ俺の足
三月だと思ふ心雨とある
(人)三月の水の温みへ目高散る
(地)思ひ出の三月難を抱いてゐる
(天)三月の空呑んでゐる身が悲し
喜郎 村選

同 弱 點 華 綠之助
弱點の口惜しさ涙となつて落ち
酔へば酒やはり弱味にふれて来る
弱點も知つて淋しい妻の襟
(人)弱點をつかみニツとほろみ
(地)生活を侮蔑、目で見ると弱み
(天)弱點を指摘されてラブレター
(軸)弱點を諍かに圍られてゐる女
華村 緒選

席題 不 意 田鶴 緒選
不意な言葉に感謝を尖らして
色町 不意を襲つた非常線
だしぬけの訪問は呑んゝある
不意に來 父を新妻持て餘まし
鐘の音も旅愁だ不意に里戀ひし
(佳)不意に訪てみれば啞の子だ
(同)お通夜の不意な運命を合ひ
同 義 理 植 夫選

不意な言葉に感謝を尖らして
色町 不意を襲つた非常線
だしぬけの訪問は呑んゝある
不意に來 父を新妻持て餘まし
鐘の音も旅愁だ不意に里戀ひし
(佳)不意に訪てみれば啞の子だ
(同)お通夜の不意な運命を合ひ
同 義 理 植 夫選

不意な言葉に感謝を尖らして
色町 不意を襲つた非常線
だしぬけの訪問は呑んゝある
不意に來 父を新妻持て餘まし
鐘の音も旅愁だ不意に里戀ひし
(佳)不意に訪てみれば啞の子だ
(同)お通夜の不意な運命を合ひ
同 義 理 植 夫選

不意な言葉に感謝を尖らして
色町 不意を襲つた非常線
だしぬけの訪問は呑んゝある
不意に來 父を新妻持て餘まし
鐘の音も旅愁だ不意に里戀ひし
(佳)不意に訪てみれば啞の子だ
(同)お通夜の不意な運命を合ひ
同 義 理 植 夫選

義理 生きて姉の嫁き遅れ
鷹義理内い男になつて貧乏し
義理故に進まぬ娘やりました
お母ちゃん、と云はば愛の義理の母
(佳)こゝろ押し義理と云字に泣け
(同)義理立て、男一匹死んで行き
(同)義理あて行かればな日暗さ
(同)義理づくに育ち女弱からず
同 屏 風 二三 屏選
屏風から明るく洩れる初聲
金屏風母の涙も隠すとこ
幹事連屏風の蔭に落ちつかず
(人)古屏風亡父の影を戀へ宵ぞ
(地)お師匠の筆が屏風に老ひかぞ
(天)春微温は屏風押しして来る
同 石 鹼 草 路選

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

同 石 鹼 草 路選
シヤホン玉くれた／＼一三三三
シヤホンの泡へ孤獨の語見てゐる
手に石鹼のまゝに母の世辭
石鹼の泡にも春は浮く希望
娘十輪の泡にはへりシヤホンの香
川柳雜誌社 如月例會々報
御池橋支部 二月十五日

名人の出幕機敷がうづめられ
名人と酒の話に成つて行き
(軸)名人の生れ越後の雪深き
いわを

兼題 人情 青 夢裡

人こゝろ夢の夢かと思はれる
人情を言は杖でうけてゆく
(佳)人情はそんなものだと思はれる
夢裡

兼題 人情 青 夢裡

(軸)芝居氣のある人情へ筆揃へ
夢裡

兼題 物忘れ 夢裡

何かかう問の抜けたやうに物忘
物忘れ 停留所へ着いた頃
(佳)物忘れ 思ひ出せない雑音よ
青兒

兼題 物忘れ 夢裡

(同)支國で女房に會ふ物忘れ
かほる

兼題 物忘れ 今日肝心の送金日
夢裡

成算と別に輪轉機が廻り
成算の二人へ月が冷やか
明かな笑ひ成算出來て居る
夢裡

兼題 成算 夢裡

額の子に其の成算を教へられ
かほる

兼題 床屋 夢裡

床屋から丸屋姿はでに出る
白髪染め床屋の云ふが儘になり
明日は日曜と床屋でのびをする
夢裡

兼題 床屋 夢裡

川柳雑誌社 高松句會 (島根)
兼題 第二支部

兼題 好郎 報

二月十五日夜 於高松青年俱樂部堂上
兼題 春 緑之助選

兼題 好郎 報

兼題 春 緑之助選

(佳)戀をもたないぼくに春が来る
(同)無我の春石地蔵にまつる花
(同)春風たいとう戀のわな
(い)青春の疲れ春の日に曝してゐ
地)春陽がたまる瓜を切るうか
(人)春うらら小鳥が青空みておま
(天)靴は光れり春の舗道の埃をり
兼題 希望 好郎

兼題 希望 好郎

希望通りなれず家の暗さ教へられ
僕の希望は春のシヤホン玉
空の廣さに希望は明るい
父の計に希望を捨てて土を踏む
(人)若き日の希望に燃え血が赤い
(地)子の希望未は大將になると言ふ
(天)健やかに育ちて希望の多き母
兼題 利那 田鶴

兼題 利那 田鶴

(佳)真心にドキンとかへる一利那
(同)キツス利那の夢を貧ぼりぬ
(同)利那主義處女の誇りは葉で
(同)利那かつきりさめた戀の夢
兼題 類 植

兼題 類 植

れむつてる兒ヒキツト動いたはほ
(佳)真剣な願ひは頬に光るもの
(同)春の宵甘く静かに頬を寄す
(人)頬杖をついて課長のだまり勝
(地)思愛が頬のまるみに光つてゐ
(天)頬にひんやりでも浮世
兼題 食 凡

兼題 食 凡

(佳)愛の巢の一緒に起き一つ皿の
(同)食ふ事に迫はれ〜春忘れ
(同)食詰かせぐ積りで出は出は
兼題 好郎

(人)ふとさみし貧り食ふてゐる
(地)うまさうに食のみてゐる病人
(天)いものかく〜食わず死は母
兼題 諦め 靖

兼題 諦め 靖

馬鹿〜しくて諦めるまででした
(人)断片的な戀が諦められず
(人)紅燈籠き諦め切れぬ日の續き
(地)諦らめて歸る 懐手も男
(地)ごうせプロ學問なんか諦める
(天)諦めだ〜ちり弱き俺の戀
兼題 期待 大

兼題 期待 大

期待した通りに當りおこらされ
六感の期待瞳に光る戀
(人)素張らしい人氣満場固唾呑み
(地)期待期待里の産着は男物
(天)落下傘期待の空にボカリ浮き
兼題 ステツブ 雨

兼題 ステツブ 雨

(秀)ステツブ 輕い街の灯かぐり
(人)砂丘に朗ホータブル踊。ステツブ
(地)ハイヒールのステツブの戀を踏む
(天)浮気者のステツブタンゴの目淋
兼題 同志句會 (島根)

(同)力痛これで進もう突破る
(同)力痛ぐつと赤ん坊さしあげる
好 郎 泉

(佳)長ひ影ひいたばは僕の黄昏や
(人)街の灯はおぼろ巡査の影を
好 郎 泉

(地)露の身五尺のかけを流す夕暮
(天)慧の陽は大地に影を生むもの
好 郎 泉

席題 影 杉
好 郎 泉

(住)懐みを犯して旅の床に臥す
(同)懐みて慶賀の筆を握みたり
好 郎 泉

(人)今度から懐みますと涙ふく
(地)眉細く女は懐み深くうつむり
好 郎 泉

(天)懐みて瞳のなかにおじぎせり
同 郎 泉

川柳雑誌社
竹原支部 句會

二月二十二日 於承春居 承 春報
兼題 年 始 清記互選

お目出度ふそれから酒の座に直り
曉の社頭へ年始の聲は澄み
碧 園 泉

角張つた姿で年始客は酔ひ
肉筆であつて賀状の有難し
承 春 帆

重役へ年始は名刺だけで済み
兼題 池 出 清記互選

傳説の何か出そうな池の面
行く雲をうつして池の静けさよ
芳 泉 帆

物音へ鯉の一群まつしぐら
池の面へふを押して行く鯉の群
碧 園 泉

憂鬱が池面へ石を投げさせる
兼題 天 才 清記互選

天才へ自由奔放な戀もあり
天才へ蒲柳の質を惜まれる
蛙 庵 烈

天才のいみじき苦悶忘れられ
天才の暮し餘りに淋れてゐる
芳 泉 烈

世をすれてあたり天才埋れてゐる
席題 サイレン 清記互選

サイレンの音へルンペン欠伸する
サイレンが鳴つてしまつた夜の吐
承 春 園

空腹へサイレンをぐる様に鳴り
席題 湯 清記互選

湯雪がボタリ朝風呂僕一人
風呂の湯を賞めてしばし無私の境
蛙 庵 泉

淨瑠璃の佳い聲湯氣の中からし
清算の氣持ちゆつくり湯にひたり
芳 泉 春

川柳雑誌社
竹原支部 句會

二月九日 於承春居 承 春報
當夜芳泉君が酒肴持参集ふ柳友八名、各席
題披露後大に歡を盡す

圓タクはのつそり横へ来て止り
死をきめた二人へ圓タクの商賣氣
圓タクで女給送つただけの戀
相談をして圓タクへ手を上げる
碧 園 帆

席題 圓タク 披講互選

ボケツトでチャカラ(は)金の音
ボケツトの煙草の粉がわびしまれ
(佳)ボケトに放浪しみる孤獨感
(同)ボケツト底で釣銭鈍く鳴り
(同)ボケツトの財布の腹も居る
(軸)微笑笑をボケツトの花名刺
春 帆 泉

爪彈へうつるな心押へて見
席題 爪 彈 蛙 庵 烈

爪彈を猫ねむそうに聞いてゐる
舞妓歸へして爪彈の夜が更ける
爪彈へ身もつまされて氷雨する
やるせない胸爪彈へ見せてゐる
(佳)親みを持ち爪彈の夜を更し
(同)爪彈へふつと見たくなり
(軸)爪彈の軽いリズムへ春の雨
席題 雑 吟(酒中吟) 互選

娘子が色々目に付く兄であり
目に角を立てて健啖蓋がなし
酒呑むと馬鹿に瘦腹振りたがり
ブラホーのざら聲がなつかしい海
茶酒酒それがよつぽ親しいよ
剃刀をそつとみつめて静脈の青さ
川柳 神戶句會(神戶)

二月二十三日 於明珠居 明珠報
兼題 屏 華 水選

春風がよるのとびらをゆするなり
隣には別嬪がゐて屏が開らさき
撮影所屏ホール紙を貼り
平凡な主義へ屏の風が喧え
新入社屏に力あまる朝
(佳)音空は招く屏をあけ給へ
(同)さしたその手で屏あけて呉れ
(同)洋室の刃返る戸へ和服なり
春 帆 泉

爪彈へうつるな心押へて見
席題 爪 彈 蛙 庵 烈

某人氏同人入社祝賀句會(大阪)

二月十九日

筈題 運轉手

於九天居

直線コース運轉手の生あくび

運轉手自宅の前を避けて行き

國道へ出て運轉手秋と知り

(軸)運轉手ゆつくり降りて用がせ

樂隊へ一人づつ子が出る長屋

お隣は又もめてるなと飯にする

隣から笑つた聲が氣にかゝり

(人)からせりながら豆腐屋長屋に來

(地)一列に長屋夕陽を眩しがり

(天)御誄歌は隣り長屋の夜が冷え

(軸)大聲で長屋同志はうまが合ひ

筈題 嘘

嘘一つついて話に身が入らず

嘘ついて友と別れた酒の味

(人)嘘が上手で大阪に住みなれる

(地)見すゝの嘘へお辭儀をさ賀

(天)秋晴れに嘘をつかればもぬ用

(軸)見えすいた嘘へ唇見つめられ

筈題 冷酒

冷酒に足を伸ばして留守居する

噴滿の腹へ冷酒きつうしみ

神経営冷酒がちとまわり過ぎ

冷酒を呑んで誤判するつもり

(人)冷酒が好きなの父の春が淋し

(地)だまて飲む冷酒の色

(天)冷酒の味を覚えて不運な妓

赤ん坊を兄といふ顔のそきに來

赤ん坊の軽さが父を怖がらせ

福耳だ福眉毛だと若い父母

(人)赤ん坊に恩給の年考へる

(地)育兒本朝から讀んだ若い父

(天)赤ん坊は男朝日が眞赤なり

制服の下の乳房がまんまるし

制服を脱いで巡查の無口なり

(人)制服でない日は別な聲の人

(地)制服で坐る電車のきつうゆれ

(天)制服に個性かくせご春は春

(軸)制服の昔の僕が夢に似て

鮎美榮世對座吟(大阪)

髭剃り

髭剃りへサイレンの音けたまし

髭剃りの鏡へ謝罪してるなり

髭剃つて日向に菊を作つてゐる

朝風呂に髭剃る男肥へてゐる

にんげんの髭も剃らねばならぬぞ

ひかり集(その十九)

冬の陽のなか

母の膝冬の陽のなかあまへける

冬の陽のなか土蔵の壁をなつかしむ

妻のふるふる冬の陽のなご編む

冬の陽のなかにおかしき蠅がゐる

頬骨に冬の陽にぶく射るなり

冬の陽のなかにお伽の國があり

冬の陽の小川に砂がひかるなり

冬の陽のなかの机に埃する

つどひ(第廿四回)

吉田水車報

ロケーション櫻吹雪のなかの戀

櫻ほめ〱日本を後にする

櫻々國寶秘佛塵之中

夜櫻の下でのおくじ讀んでゐる

總踊り櫻がさして暮となり

畔柳社一葉集(一月號)

山雨樓選

雪落ちる音吹響の母と寝る

小正月神酒を供へて獨り居る

生酔ひへ寒行きつう太鼓打ち

神意ではない賽銭の桶を据え

畔柳塔二月號

見送り

山雨樓選

土橋まで来て見送りへ梅をほめ

銅羅はなる〱テリプ持つ力

思ひ出の橋見送りに霧深し

言傳に念を押されて見送られ

チャップの禮背で受けつゝ靴を穿き

見送りの上をさすめて鷗飛び

見送りの分倉長が前に出る

團體を見送る女中からかわれ

(人)キヨナラ汽車はカーブにかゝる

(地)見送りの涙朝鮮服の袖

(天)見送りを断つて出た星あかり

系つる吟社句會

(富山) 富山市清水町七八

二月十七日 於 照坊主 居

兼題 雪

酒井照坊主報 照坊主選

教室にやつと火が出る雪もよみ 銀富士
唐獅子の口へ舞ひ込むぼたん雪 呂久兒
(佳)雪國の女はつがなく白し 野穿
(軸)波止場へ雪を知を人が降り 照坊主

席題 屋氣樓

照坊主選

樂天家には銚子がほしい屋氣樓 野穿
(軸)知事へ電話のかゝる屋氣樓 照坊主
(同)焦點がこの演に合ふ屋氣樓 同

森巷巴追悼句會

(釜ヶ池)

三月二日 於舊館娛樂室

席題 別れ

緋紅報 五選

別れともないふりかへらず行く男 評太
見送りの母と別れる春の風 錦雀

川柳書架 (五四)

昭和類題高點句集

山川花戀坊編

▼巻頭には高須唾三味氏の「序文として
……」がある。次いで「編者のことば」が
ある。

眼に觸れた雑誌から高點句を書抜いて
行く中に二千、三千、忽ち五千句を超え
た。それを引つ繰返して讀むと多くのも

ハモニカの清い別れとなりました
酔ひかれる酒で別れた港の灯

坂に陽があり靈柩車降りてゆく
春が来る別れ日なご思ふまい

辻で會ふ男どうしは直ぐ別れ
土曜日の紅茶一つで別れたり

別れ來て踏切番の白い旗
席題 森

北斗星の眞上にきらめけり
哀別の森にむりがながれぬる

夕焼る森にからすのこゑあわれ
森を出て又森に入る我が心

脱走兵具のやうな森へ逃げ
森にらんで反村長派がとほり

入營の旗が小さく森に見え
森かげに兵隊がゐたピクニック

森の灯はまだく遠いひとり旅
病み悲し小さな森が夕焼ける

子の夢のお伽噺の森深し
のをそこに發見することが出来る。他の

柳人は一冊に纏めたら何うだと言はれる
し考へて見ればこれを印刷に付すること

は、好く初けた人々にはノート代用にな
りました初心の人々にはよき川柳ガイド

ブックとなるであらうと信じて上梓する
ことにしたのである。(以下略)

昭和乙亥十年如月

芝濱松町の居にて

花戀坊識

そして巻尾に品川陳居氏の「跋」が掲げて
ある。

▼昭和十年三月十五日發行、四六版横綴

白濱偶會 (和歌山)

三月二十九日 於白濱館

堀楓林報 路郎選

温泉に浸たり儲ける事を考へる 明荷
温泉の角度から見ると 心中沙汰

温泉のたよりもう容態の書いてどし
編みもの、毛糸が切れる永湯治

温泉の宿のどてらで女身だしなみ
温泉へ來て二三日夢のなみ

湯治場へ大衆物を忘れて來 夜素
湯の宿の下駄で嬉しい春の海 柳路

母と娘と温泉に來て父の事 松代
女中でもからでから温泉に這入り

新婚の今日はうれしい白真濱 同
國を思ふ圓月嶋の月明り 同

崎の湯で朗らかなのが肉體美 同
三段壁を引返へしたる二人なり 同

二一八頁、定價壹圓、編者兼發行人東京
市芝區濱松町三丁目四番地十一山川信男

▼編者は川柳三人旅で知られた山川花戀
坊氏で、川柳愛好心が生んだ句集だけに

初心者の好參考書であらう。

川柳談

長崎柳秀著

▼大阪帝國大學醫學部學友會報別冊とし
て刊行されたもの、本稿は殆んど先人の

論評其他を引用轉載せるものである。

▼菊版二二頁、非賣品。

編 輯 窓

山 雨 樓

▼本號は特輯
櫻花號とした
櫻を中心とし

た古句に就て
摩耶火・紳樂
兩氏の執筆を
煩はした。

▼本號では原
稿が非常に幅
轉したので割

愛したものが尠くない。幸ひ諒
せられたい。

▼殊に「雜筆春秋欄」へは面白い
筆觸の好コントが集つたので、
巧みにモザイクしたいものだと
思つてゐたのだが、紙面の都合
で次號へ譲ることとした。

▼「春窓懷古録」はかほる、里十
九兩優(?)の思ひ出話。柳の語
題がはづんだこともゆかしい。

▼滿洲熱河省凌源にある同人岩
崎柳路氏夫妻が、三月二十六日
ひ、つこり不朽洞を訪問された
幾年振りかの來遊で四月上旬と

聞いてゐたのだが早かつたのは
尙うれしい。約一ヶ月滯阪され
るさうである。

別項の通り四月七日道頓堀俱
樂部で歡迎會が開催されるか
ら多數諸兄の御參會を祈る。

▼路郎先生はこの珍客を案内す
るべく雨紀白濱へ清遊を試みら
れ、三十一日歸阪された。

尙白濱では田邊町から楓林、
素囊、明荷、夜梅の諸氏が馳付
けられて路郎先生、柳路氏夫妻
を圍んで、柳談の花を咲かせら
れた。

▼同人平井與三郎君が、葉瀉節
子嬢と柳愛結婚されたので、三
月二十三日本社俱樂部(里十九
屋階上)で祝賀會が催された
當夜路郎主幹は忌中のごとで缺
席されたが、なごやかな句筵で
あつた。

▼京都から「川柳ベル」が創刊さ
れた。元本社支部幹事の平岩司
郎君も之に加はつて活躍してゐ

る。發展を祈る。

▼尙同地からは、しばらく沈黙
を守つてゐた吉田綠朗を中心と
して、「醍醐味」が五月發刊され
る由。

▼藤里好古氏は三月二十日の大
毎へ(大阪)ところ、ごころ——
天滿宮界隈)を執筆された。

▼番傘川柳社では同誌の發行部
數倍増記念として、四月三日雲
水寺で園遊會を催された。柳壇
の爲め慶賀に堪えない。

▼尙同社では大毎の選抜野球大

哀 悼

路郎主幹の四男洋ちゃん
(昭和九年一月二十日生)
が三月十九日午後十一時
に亡くなられました。

謹んで哀悼の意を表しま
す。

川柳雜誌社

會へ同人數氏が毎日交替で出席
野球川柳を作られるさうだ。

(大毎紙三月二十九日報)

▼洋ちゃん(路郎先生の四男)

の死は、實にお氣の毒に堪えな
い。癩疹から肺炎を併發され、

葎乃奥様は洋ちゃんを預けられ
てゐた紀州へ赴かれて、重態の
枕許につききりで看護を盡され
たのであるが、天命はごうする

ことも出来なかつた。村の人々
も大變惜しまれたさうである。

▼三月の二十日會に出席して初
めて洋ちゃんのことを聞き、集つ
たものも力なく、暗い氣持を抱
いて引返した。當日路郎先生は
紀州で葬式を營まれるべく赴か
れて御不在であつた。

▼僕は亡き母の忍び草として、
「母の小傳」を作成し、お悔みを
頂いた方々へ御高覽に供した。

それに對し親切な御返事を頂い
て恐縮してゐる。

川柳雜誌案内

六號活字十四字三行金五十錢、一冊増すこ
こに金十錢、但し新多の手代用券、
改題、句會案内、柳更廣告、その他

並製 合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷
より十卷まで

各壹卷 金壹圓五十錢
大阪市内送料 壹冊 六錢
市外送料 壹冊 廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「紅」 路郎 選
四月十日締切

その他雜吟を募る
用紙 官製ハガキ (化粧柳
壇と明記の事)

賞品 秀逸數句薄謝を呈す
投吟所

大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豊島區高田本町二の一
四六八 川柳きやり社
(取次所) 川柳雜誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

温 泉 五句
切 四月二十日

貝細工 五句
切 五月二十日

大阪市西成區玉出本通
三ノ三六

麻生路郎氏宛

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選
用紙ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ツ橋南

大阪朝報社
増位汀柳宛

毎日川柳の事を掲せてゐる
大阪朝報をお讀み下さい。

緑雨居偶會

四月十五日夜
兼題一足」三句

レコードを聞きながら
久し振りの偶會

住吉區平野西之町八三
橋本綠雨

川柳叢書刊行會發行

黨派を超越せる無色の豪華版
創刊五月十五日(毎月一回發行)

醍醐味

(全頁二度刷見返り付)
(製本カガリ綴八十頁以上)

創作 十句迄

四月十五日迄

(投句者は切手十錢封入創刊號呈)

京都市松原千本西入

醍醐味事務所

岩崎柳路氏夫妻歡迎

川柳句會

日時 四月七日午後六時
場所 道頓堀俱樂部
話題 熱河の話 岩崎 柳路
兼題 「錢」三句 麻生路郎選
會費 三十錢

光耀句會四月例會

場所 キング喫茶室 南海線玉出驛下車
本通十五間道路路北ノ辻西入

時日 四月十一日(木曜日)午後四時頃より

會費 參拾錢
兼題 「素足」「妥協」各題十句以内

春を謳歌してやまない心は、また川柳を謳歌してやまない心
でなければ嘘です、女流川柳家は是非御出席下さい。遠方の方
には兼題の投句を必ず御記憶れがひます。投句家及び出席
者は婦人に限りませんが、本社選者の方々でお暇のあるお方は
御出席下さいまして御援助れがひます。

主催 川柳光耀會
幹事 竹内機見女

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿紙と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第六號課題

四月五日締切

(各題十句以内)

税金 須崎 豆 秋選

妻 水谷 鮎 美選

第十二卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

信心 高橋かほる 選

夕立 生田 翠 夢選

每 號 募 集

近作柳樽(千種吟) 麻生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は事務所宛

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませすれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にては頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號、りと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひま、▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年 三月廿五日印刷

昭和十年 四月 一日發行

第十二卷 第四號
(毎月一回一日發行)

禁 編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

無 發行 所 川 柳 雜 誌 社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

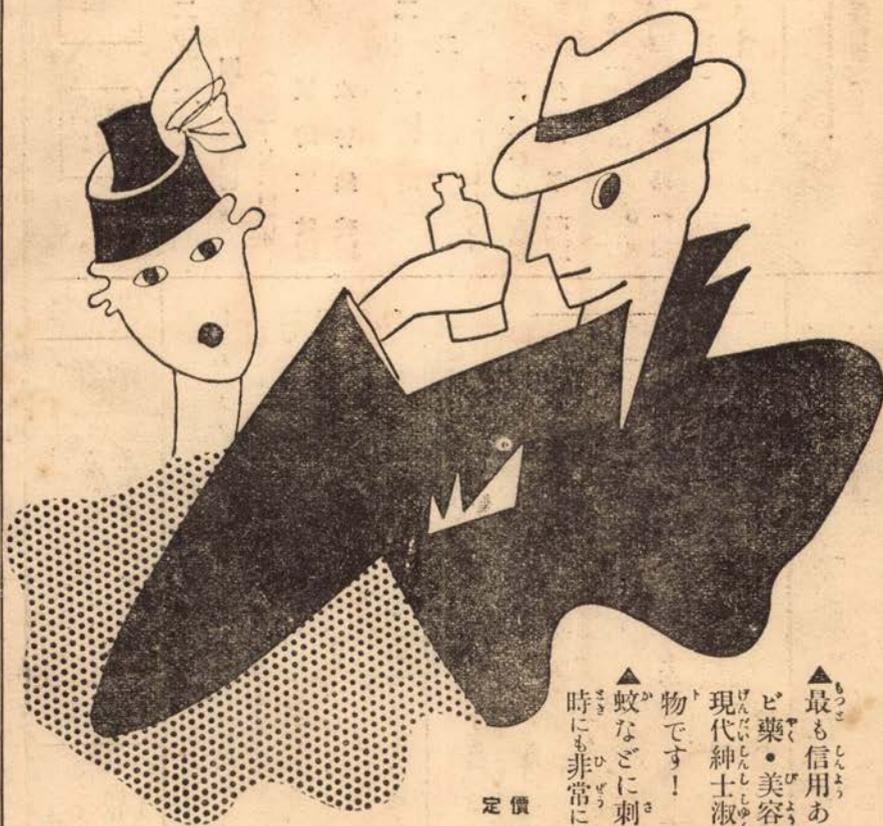
斷 事務所 大阪市天王寺區上沙町一丁目五番地
電話六四四番
振替大阪七五〇五〇番

轉 載 川 柳 雜 誌 社

賣 店 大賣捌 二盛社書店 明文堂 其他 市内 各書店
一 (大阪) だん 東京堂 だん 嚴松堂 やつ 吉岡書店 あさ 玉森堂 だん 紀
伊國屋 だん 三味堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚 (京
都) 三七 (名古屋) 輝觀堂

水顔美びきにと

うせまりを物を出で吹きびきに
うせまりなに麗綺らか地り生



▲最も信用あるニキ
 ビ薬・美容劑！
 現代紳士淑女の愛
 物です！
 ▲蚊などに刺された
 時にも非常によし！

定 價
 .30
 .50
 1.00

館天順谷桃 舖本